

尼門跡の文字言語生活資料

—尼門跡の言語生活の調査研究(Ⅳ)—

井之口 有 一
堀 井 令以知
中 井 和 子

目 次

第Ⅳ部 尼門跡の文字言語生活資料 (§ 95)

I 尼門跡の文字言語生活概説 (§ 96)

1. 系 図 (§ 97)
2. 待遇法 (§ 98)
3. 表記法(字形表など) (§ 99)

Ⅱ. 尼門跡の御日記 (§ 101)

1. 解 説 (§ 102)
2. 大聖寺御日記 万治三年一月 (§ 103)
 - (1) 本文 (§ 104)
 - (2) [注17] (§ 105)
3. 宝鏡寺御日記 万治三年一月 (§ 106)
 - (3) 本文 (§ 107)
 - (4) [注18] (§ 108)

Ⅲ. 尼門跡関係のお文 (§ 109)

1. 解 説 (§ 110)
 - (1) 解説 (§ 111)
 - (2) お文を書くときの注意 (§ 112)
 - (3) 折り紙・ちらし書き手本 (§ 113)
2. 明暦三年宝鏡寺御日記紙背文書 (§ 114)
 - [付1] 慶安四年宝鏡寺御日記紙背文書 (§ 130)
 - [付2] 万治三年宝鏡寺御日記紙背文書 (§ 135)
 - [付3] 大聖寺倫宮のお文 (§ 141)
 - [付4] 靈鑑寺宗恭宮のお文 (§ 143)

[参考] 明治以後の尼門跡などのお文 (§ 145)

む す び (§ 152)

[補記] 「貞丈雑記」 (§ 153-1) ・ 「女官」 (§ 153-2)

写真版 ⑩ 宝鏡寺明暦3年・大聖寺万治3年御日記表紙 ⑪ 字 形 表

- ⑫ 大聖寺万治3年1月1日御日記 ⑬ 宝鏡寺万治3年1月1日御日記 ⑭-1 文箱
⑭-2 あて名・結び文・うわ包 ⑮ 折り紙・ちらし書き手本 ⑯ 御所²おほせのよしにて
⑰ けふの御きくわためてたく ⑱ ちか²の御せつく²にて
⑲ ミくしけ²よりたたいま申との ⑳ 倫宮のお文 ㉑ 御機嫌伺申入度



⑩ 宝鏡寺明暦3年御日記表紙(上段)
大聖寺万治3年御日記表紙(下段)

I 尼門跡の文字
言語生活資料 概 説 (§ 96)

前稿の音声言語生活資料に対して、本稿では尼門跡に保存されている、教養の高い女性の筆になる御所風の文献資料を紹介する。この新しい文献的根本資料の整理によって、尼門跡の言語生活の実態は一層明らかになるものと思われる。

幸いにも、大聖寺には万治3年(1660年)以降、奥の日記が完全に保存され、また宝鏡寺においても同様に、慶安元年(1648年)以降の日記が多数残存している (§ 102参照)。これら両寺の日記はそれ以来300年間の長きにわたって奥の祐筆等によって継続的に書き記されてきたものであって、「お湯殿の上の日記」とともに女筆になる日記として、他に類例の少ない貴重な文書である。また、本稿において万治3年のものを掲げたが、それは「お湯殿の上の日記」が欠本となっている箇所、それを補う意味もある。

お文(消息)についても、本稿に示したような御所風のお文が、尼門跡から御所へ (§ 146・お文27など)、御所から尼門跡へ (§ 114)、また尼門跡間 (§ 132・お文17) において、日記よりもさらに長い年月にわたってとり交わされてきたのである。これは複製写真で示したように、女房奉書の系統をひく御所風の消息であり、一定の御所風の様式・書式に関する特殊な用法が故実として残っている (§ 113・写真⑩, § 115・写真⑪, § 118・写真18参照)。なお文献資料の若干については前稿「尼門跡の言語環境」 (§ 31・35・58) においても取扱ったので、それを参照されたい。

この研究に当たって、特に大聖寺門跡石野慈栄様・宝鏡寺門跡花山院慈薫様からは資料の拝見を許され、その読解についても有益な指導を与えられた。また是沢恭三博士からは多年の研究になる宝鏡寺日記とその紙背文書の手控を貸与され、その親切な指導を受けることができた。ここに記して感謝するものである。

次に本稿における人的関係を明らかにするために系図 (§ 97) を掲げ、さらにその待遇法 (§ 98) および表記法 (§ 99) についても概要を示す。

1. 系 図 (§ 97)

次に示す系図は、ここに取り扱った万治3年御日記当時の大聖寺の宮(19世芳桂院, 注41)と宝鏡寺の宮(21世高德院, 注43)を中心にしたものである。

系図に示したように、大聖寺の宮(19世芳桂院宮)、宝鏡寺の宮(21世高德院宮)は、ともに後水尾院を父とされているが、前者は京極局(園家の出)を母とし、後者は後西天皇と同じく蓬春門院(櫛笥家の出)を母とする。従ってお日記に出る人名も自然この母方に関係ある人々が多い。

親王方では、それぞれの日記には、それぞれの同母のご姉妹(ご兄弟)(谷宮・朱宮一注141, とし聡宮一注285等)の名が多く、公家方の出入りも母方の父君やご兄弟その他関係の人々(園^②, くしげ^②等)の名が多く、そこに交際圏の幅が自然うかがえるようである。ただ現在の段階では、日記にあらわれる人名は、特に高貴な方や身分の高い人以外は詳らかにすることができなかったが、この点が明らかになれば、交際圏の幅、各尼門跡間の交際圏の重なり具合をかなりはっ

- 42 仙寿院[㊟]（宝鏡寺20世宮）…仙寿院宮久嚴理昌尼長老。後水尾天皇第5皇女，母儀は蓬春門院。八重宮と称す。寛永8年正月2日誕生，同21年3月21日入寺，正保3年11月27日得度，明暦2年正月8日薨去，御年26。真如寺に葬る。
- 43 高德院宮（宝鏡寺21世宮）…高德院宮義山理忠尼長老。後水尾天皇第15皇女，母儀は蓬春門院。柏宮^{かえのみや}と称す。寛永18年8月22日誕生，明暦2年3月2日入室得度，元禄2年8月26日薨去，御年49。真如寺に葬る。万治3年当世の宮。（注131，§115・注228参照）。
- 44 禁中[㊟]（後西天皇）…111代。後水尾天皇の皇子，母儀は蓬春門院。寛永14年11月16日降誕，明暦2年正月23日即位，寛文3年正月26日讓位，貞享2年2月22日崩御，御年49。泉涌寺に葬る。（注94・同160，§115・注232参照）
- 45 新院御所[㊟]（明正院）…109代。後水尾天皇皇女，母儀は東福門院。元和9年11月19日降誕，寛永7年9月12日即位，同20年10月3日讓位，元禄9年11月10日崩御，御年74。泉涌寺に葬る。（宝18日参照）。
- 46 女御[㊟]（明子女王）…高松宮好仁親女王（実は備前少将光政朝臣女）。母儀は越前宰相松平忠直卿女。寛永15年誕生。後西天皇女御。延宝8年7月8日薨去，御年43。大徳寺中の龍光院に葬る。

2. 待 遇 法 (§ 98)

ここに取扱うお日記・お文のうち，主として明暦ごろのお文の待遇表現として，最も特色のあるものは，字形表 (§ 100・写真⑩参照) に示した次の諸形式である。

まいる・まいらるゝ・まいらせらるゝ，まいらせ候・まいらせられ候，られ候，そんし候・そんしまいらせ候・そんしまいらせられ候，ならせられ候，候へく候・まいらせられ候へく候，申とて候，申まいらせ候，御入候，めてたくかしく，まいる 申給へ（徳川初期脇付），人々申給へ候（明治以後脇付），[㊟]（丸さま）・[㊟]（殿）

それらの諸形式を構成する基本的要素は，「候」「まいる」「御」「被」「申」「入」「あがる」「す・さす」「るゝ・らるゝ」等であり，特にこれらのうち，語構成の基本となるものは，「候」「まいる」等である。たとえば「まいる」と「候」を含む語構成としては，

まいり候，まいらせ候，まいらせられ候，まいらせられ候へく候，申入まいらせられ候，まいらせ候へく候，申上まいらせ候，…入まいらせ候，…上まいらせ候，被下まいらせ候等がある。これらの例でわかるように，この社会の語構成の特色のひとつは，語を幾重にも重ねるところにあり，その重ね方の種々の組合せによって待遇法の諸段階が生れる。

例えば，「申入まいらせ候」は，上臈が宮中の女官にあてた場合であるが，「申入まいらせられ候」となると，お仕えする宮様の命をうけて，上臈が代筆して出す場合である。また「遊ばし候」は，たとえば女官どうしに（尼門跡間にも）使用するが，「遊ばされ候」となると，陛下から宮様までに限って用いられる。

なお，「まいる」は，元来下から上に対する謙讓語であるが，お文においては，

お心やすく覚しめしまいらせ候（文7・§121-1）

こなたへ御めにかいまいらせられ候へく候（文8・§122）

のような使用法があり，この中で用いられている「まいる」のような用法は，語の自立的性格がうすれて，丁寧語として用いられるに至ったものと思われる。これは候文における「候」と同じ経過であろう。

なお字形表 (§ 100) に示した敬語表現のうち、明治以後のお文には「候へく候」「申とて候」「御入候」(被入候)などは使用されなくなった由である(大聖寺門跡談)。

二人称の代名詞の場合にも、次のような特殊な用法(お文の場合)がある。

御前^{おまえさま}候(御まえ候)…目上もしくは同輩。

特に目上に当てて敬意を表するときには「鍾子^{かねこ}候」 (§ 143・写真^㉑参照)のように相手の名を書く。

そなた候…同輩。

そもじ候…目下(「そもじ^{そまじ}候」はさらに下めに)。

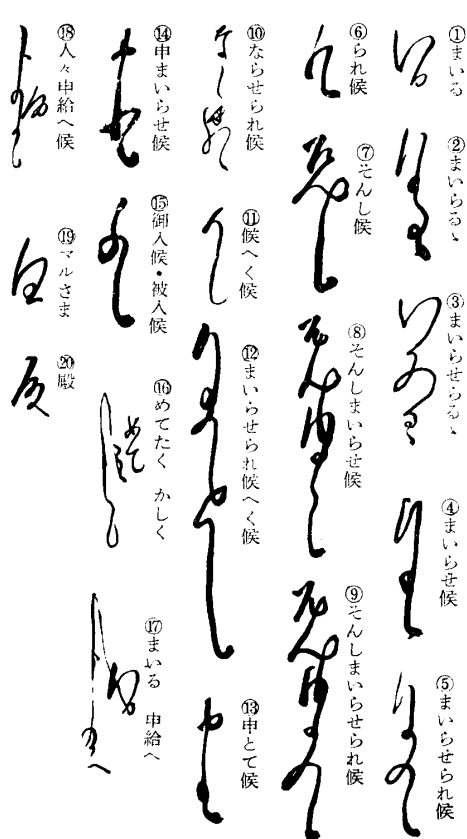
この社会では、このような特殊な語構成がしばしば用いられた結果、次の字形表にみられるような簡略化された字形が生れたのであろう。そしてこの字形の特殊な簡略化は、この社会の御所風の典雅さによるものとも考えられる。

さらにまた敬意を表わすための闕字(宝15日など)や抬頭(宝6日)なども行われていることはいうまでもない。(100—2参照)。

3. 表 記 法 (§ 99)

「字形表」を中心として、使用例を述べることにする。(各原文写真参照)。

字 形 表 (§ 100・写真^㉑)



- ① まいる…「こふんかう二つ——」(写真^㉑, 注56), 「わかゆの御行水——」(写真^㉒)。
- ② まいらるゝ…「御礼に——」(写真^㉓)。
- ③ まいらせらるゝ…「御としたまに金壺分二つ——」(写真^㉔, 注49)。
- ④ まいらせ候…「いたゝき——」(写真^㉕), 「祝入——」(二番目)(写真^㉖)。
- ⑤ まいらせられ候…「いわ井入——」(写真^㉗), 「めてたきとしに移り——」(写真^㉘, 四番目)。
- ⑥ られ候…「いわ井まいらせ——」(写真^㉙)。
- ⑩ ならせられ候…「やうとく院^{ゑん}へ御礼ニ——」(写真^㉚, 注40, 48), 「御きやくてんへ——」(写真^㉛)。
- ⑪ 候へく候, ⑫ まいらせられ候へく候…「御めにかかけまいせられ候へく候」(写真^㉜, 注273)。
- ⑬ 申とて候…「此よし——」(写真^㉝)。
- ⑭ 申まいらせ候…「年始御祝義——」(写真^㉞, 十七番目)。

番目)。

- ⑮ 御入候…「色よく——」(写真⑩)。
 ⑯ めてたくかしく…「たのミ申候——」(写真⑪), 「めて度かしく」(写真⑫, 二十四番目, 書き留の句)。
 ⑰ まいる 申給へ…「たつ御ちの人_々まいる 申給へ」(写真⑬, 脇付け)。
 ⑱ 人々申給へ候…「典侍鍾子_々 同津根子_々へ 人々申給へ候」(写真⑭, 脇付け)。
 ⑲ 々…(丸さま)「やうとく院_々へ」(写真⑮)。
 ⑳ 々…殿, 「こかわ_々」(写真⑯)。

以上はお文に多い特殊な字形について述べたが, さらに表記上注意すべきことを次に掲げる。漢字の使い方として, 「御大めん」(御対面, 宝3日), 「御大まいり」(御代まいり, 宝23日), 「しん女寺」(真如寺, 宝8日), 「長に有」(帳に有, 宝3日・5日)のようなものがある。

かなづかいについては定家かなづかいによろうとしたものと思われる。

原文には原則として濁点が打ってないが, 「御まつじ」(宝14日)・「じゆせい」(宝14日)・「れつじゆそ」(宝28日)などのように, 固有名詞には, 濁点が打ってあるものもある。

原文(縦書き)で, 特に右側下に細書してあるものに, 「御れい=」(大1日, 写真⑯参照), 「御としたま=」(同), 「おもて=て」(宝10日), 「これへれいなし」(宝18日)のような格助詞の「=」「へ」, その他「御ちやわん+」(大26日)「わらまき一折十五わ」などの数詞がある。

なお「こふんかう」(大1日, 小文庫), 「御きつしやう」(宝1日, 御吉書)や, 「れんせい中将」(大3日, 冷泉中将), 「御さぎんてう」(宝15日, 御左義長)のように, 当時の発音を知ることができるものもある。

印刷化に当って, 変更した点は次のとおりである。(§ 100—2)

- ①本稿所収の日記やお文の本文は, 原則として原文どおりに採録する方針を採った。ただし, 活字化に当って, 印刷困難な既掲の「字形表」(§ 100)の文字や変体がなほ現今普通のかな字体に改めた。
- ②原文は御家流の草体による縦書きである(原文の写真⑯⑰⑱参照)が, 便宜活字体による横書きに改めた。
- ③原文には句読点が打ってないので, 便宜上, 句点に相当する箇所を一字分空白にした。また 闕字に当る箇所には二字分空白にした(§ 104・大9日参照)。
- ④お文の「返し書き」に当る部分は二字下げにして示した(文7・§ 121, 文8・§ 122, 文24・§ 141, 文27・§ 146参照)。
- ⑤写真を添えたお文の活字化に当っては, 改行に当る箇所(行末)を明らかにするために, 行末に「」印を付けた。
- ⑥読解のできなかつた箇所は, □・〔 〕で示し, 虫損は^{〔ムシ〕}〔 〕, 破損は^{〔破レ〕}〔 〕, 切断は^{〔切断〕}〔 〕などとした。

なお日記の日付を示す場合には, 次のような略しかたをした。

大1日……大聖寺日記万治3年1月1日の略 宝15日……宝鏡寺日記万治3年1月15日の略

Ⅱ 尼門跡の御日記 (§ 101)

1. 解 説 (§ 102)

文字言語生活資料として、以下に掲げる大聖寺御日記と宝鏡寺御日記は、御所を中心とする言語生活を知るためには貴重な資料である。

尼門跡の日記には、奥の日記と表の日記との二種があるが、ここでは奥の日記のうち万治3年正月のものを取扱うことにした。かつての京都御所の生活については、「お湯殿の上の日記」などによって推察できるが、尼門跡に残存するこの奥の日記を通して、宮門跡(当世の宮は大聖寺19世芳桂院宮、宝鏡寺21世高德院宮)の日常生活の実態を明らかにすることができる。

日記はただ保存しておくのみではなく、実生活上(年中行事・贈答その他)に利用されたようである。

宝鏡寺御日記(楮紙使用、縦33.5cm×横22.5cm)は大聖寺御日記(生半紙使用、縦24.5cm×横17.5cm)と比較して、若干古いもの(慶安元年—1648)が保存され、また記事もやや詳しい。が、宝鏡寺では天明の大火等によって消失した部分が多い。しかし大聖寺御日記は万治3年(1660)以降ほとんど欠けることがなく、よく保存されている。また、宝鏡寺御日記には貴重な紙背文書がみられるのに対して、大聖寺御日記にはそれがない。

① 大聖寺御日記

大聖寺御日記は、万治3年以降現在に至るまで、寛文2年、延宝2年・同5年、元禄3年・4年・5年・13年の7冊を除くのほかは全部保存されている。

これらの御日記は、1か年を以て1冊にとぢられ、例えば、写真⑩のように、「万治三庚子年 御日記 従正月」と表書きした表紙が付けてある。この表書きのかき方は、「寛文三年 日帳 うの正月一日」等、年によって多少異なり、「御日記」という名称のほか、「日帳」「日次記」「御日次」「年中御日次」等と付けてある。また表紙には改元の場合にはその旨を記し、その他の重要記事の項目を特に表書きした年(例えば、「卯正月吉日元日に禁中^②」)もある。

② 宝鏡寺御日記

宝鏡寺御日記は、慶安元年以降のものが保存されているが、焼失したものも多い。慶安から宝暦年間のもので、筆者の拝見したものは次のとおりである。

慶安元年(7~12月)・2年・4年(8~12月)、承応2年、明暦3年(1~6月)、万治3年(1~6月)、寛文4年(1~5月)・5年・6年・8年・9年・10年・11年・12年、延宝元年・5年(5~12月)、天和3年・4年、貞享2年・3年、元禄4年・6年・8年・9年・10年・11年(1~8月)・12年・15年・16年・17年、宝永5年・6年・7年(7~12月)・8年(1~8月)、正徳元年(7~12月)、享保12年・13年・14年・15年、元文3年・6年、寛保元年(7~12月)、宝暦9年・11年・12年・14年(なおこれらの年次以後のものも長持に一杯分保存されている由である。)

この御日記には数冊を除くのほかすべて紙背文書(御所からのお文)がある。日記の筆者を表

書きしたものは、「承応二癸巳年閏六月 日々記 盛侍者 堅侍者」(盛侍者・堅侍者は当番の筆者と思われる)の年のものだけで、他にはそれがない。が、大聖寺御日記も宝鏡寺御日記もその筆者は奥の御祐筆であると思われる。(§ 31・35参照)

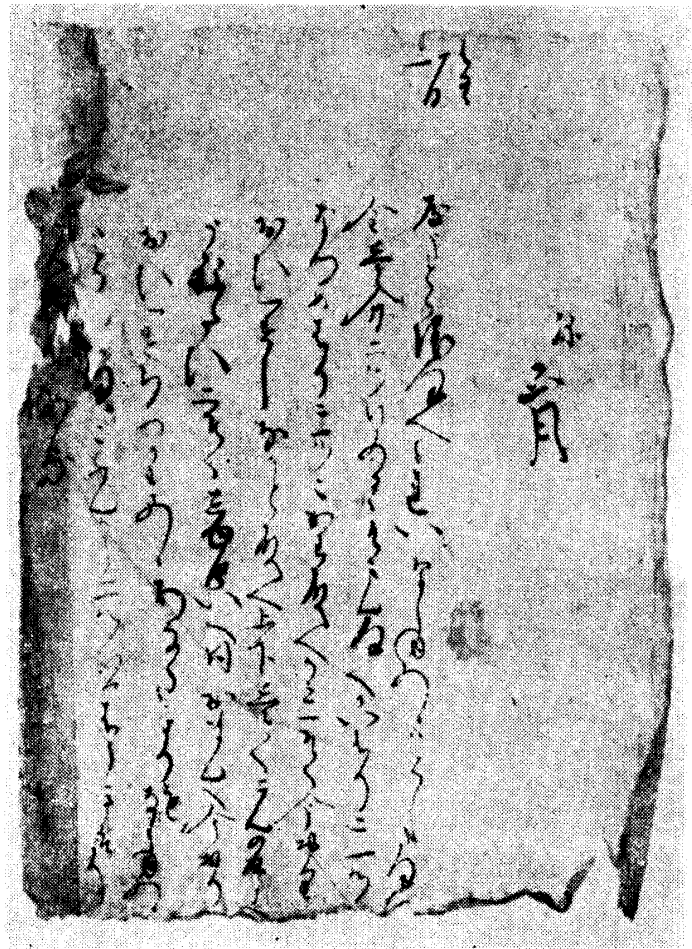
2. 大聖寺御日記万治三年一月 (§ 103)

(1) 本 文 (§ 104)

祢 正 月
47

はるゝ 一 日

やうとく院⁴⁰へ御⁴⁸れいゝならせられ候 御⁴⁹としたまに金⁴⁹巻分二つまいらせらるゝ そきん⁵⁰殿
へかい⁵¹はりこ一つなつめ⁵²はりこ一つ
こかわ⁵³殿へか⁵⁴ミーそく今⁵⁴おりおひ一
すし⁵³なかと殿へ上下⁵³巻くこのせう
へう⁵³ねたひ二そくし⁵³ゆせいへ同⁵³おま
んへ今⁵⁴おりおひ一すち⁵⁴つかわされ候
あなた⁵⁴よりもならせられ候 御⁵⁴とし
たまゝ⁵⁵こふんかう二つ⁵⁵まいる はう⁵⁷
き⁵⁵殿より⁵⁵こん⁵⁶〔ふいり⁵⁶カ〕あ⁵⁷かる⁵⁸



はるゝ 二 日

院⁵⁹御所⁵⁹へ御⁵⁹れいゝならせられ候
御⁵⁹としたまゝ⁵⁹くわし⁵⁹こん⁵⁹ふ⁵⁹五⁵⁹わ⁵⁹あ⁵⁹か
る 女⁴⁶院⁴⁶御所⁴⁶へ⁴⁶す⁴⁶きは⁴⁶ら⁴⁶十⁴⁶て⁴⁶う
さ⁶¹け⁶¹お⁶¹ひ⁶¹三⁶¹す⁶¹ち⁶¹あ⁶¹か⁶¹る し⁶²ん⁶²中⁶²な⁶²こ
ん⁶³殿⁶³へ⁶³御⁶³ち⁶³や⁶³わ⁶³ん⁶³廿⁶³し⁶³ん⁶³少⁶³御⁶³将⁶³殿⁶³へ
ち⁶⁴や⁶⁴わ⁶⁴ん⁶⁴十⁶⁴ゑ⁶⁴も⁶⁴ん⁶⁴の⁶⁴す⁶⁴け⁶⁴殿⁶⁴へ⁶⁴御⁶⁴ち⁶⁴や
わ⁶⁵ん⁶⁵廿⁶⁵まい⁶⁵らせ⁶⁵ら⁶⁵るゝ く⁶⁵は⁶⁵ん⁶⁵御⁶⁵な
り⁶⁶候⁶⁶て⁶⁶か⁶⁶て⁶⁶殿⁶⁶御⁶⁶まい⁶⁶り⁶⁶な⁶⁶さ⁶⁶れ⁶⁶候 御⁶⁶
さ⁶⁶か⁶⁶つ⁶⁶き⁶⁶出⁶⁶候 い⁶⁶つ⁶⁶ミ⁶⁶殿⁶⁶御⁶⁶まい⁶⁶り⁶⁶御⁶⁶
ち⁶⁶や⁶⁶わ⁶⁶ん⁶⁶廿⁶⁶上⁶⁶ル 小⁶⁶一⁶⁶て⁶⁶う⁶⁶殿⁶⁶御⁶⁶まい⁶⁶
り⁶⁶な⁶⁶さ⁶⁶れ⁶⁶候 御⁶⁶ち⁶⁶や⁶⁶わ⁶⁶ん⁶⁶十⁶⁶ま⁶⁶い⁶⁶る
ゑ⁶⁶ち⁶⁶せ⁶⁶ん⁶⁶殿⁶⁶も⁶⁶御⁶⁶まい⁶⁶り⁶⁶水⁶⁶引⁶⁶五⁶⁶十⁶⁶は⁶⁶上⁶⁶ル

⑩ 大聖寺万治3年1月1日御日記

はるゝ 三 日

お⁶⁷た⁶⁷き⁶⁷少⁶⁷将⁶⁷殿⁶⁷れ⁶⁷ん⁶⁷せい⁶⁷中⁶⁷将⁶⁷殿⁶⁷な⁶⁷か⁶⁷そ⁶⁷の⁶⁷ひ⁶⁷く⁶⁷ち⁶⁷殿⁶⁷か⁶⁷し⁶⁷ん⁶⁷殿⁶⁷御⁶⁷まい⁶⁷り⁶⁷な⁶⁷さ⁶⁷れ⁶⁷候 御⁶⁷さ⁶⁷か⁶⁷つ⁶⁷き⁶⁷出⁶⁷候
ゆ⁷⁰ふ⁷⁰ふ⁷⁰卿⁷⁰御⁷⁰まい⁷⁰り⁷⁰や⁷⁰う⁷⁰か⁷⁰ん⁷⁰三⁷⁰さ⁷⁰ほ⁷⁰上⁷⁰ル 三⁷¹は⁷¹ん⁷¹入⁷¹ こと⁷¹す⁷¹き⁷¹二⁷¹そ⁷¹く⁷¹あ⁷¹ふ⁷¹き⁷¹は⁷¹こ⁷¹一⁷¹つ⁷¹く⁷¹た⁷¹さ⁷¹れ⁷¹候 ひ⁷²ら⁷²お⁷²か⁷²殿⁷²
御⁷³まい⁷³り⁷³と⁷³う⁷³せ⁷³ん⁷³へ⁷³い⁷³す⁷³こ⁷³し⁷³あ⁷³か⁷³る 二⁷²せん⁷²殿⁷²御⁷²き⁷²さ⁷²御⁷²まい⁷²り⁷²く⁷²る⁷²み⁷²す⁷²こ⁷²し⁷²上⁷²ル ゆ⁷⁴らの⁷⁴み⁷⁴や⁷⁴

〆御礼= ならせられ候 御としたま=⁷⁵かや一はこ御ちの人よりこうりさたう一まけ物上ル⁷⁶

はる、 四 日

ほん光院〆御れい=⁷⁷御まいりなされ候 御としたま=⁷⁸うかいちやわん三つまいる その〆御礼⁷⁹
 = 御まいりなされ候 〆ん光院〆も御まいりなされ候 御としたまに御ちやわん廿まいる ^ミ
 んふ〆も御まいりなされ候 入道〆より [破レ] ⁸¹ 御たるまいる⁸²

はる、 五 日

ほんそん御かゝみひらきあり 御いわ井やうとくいん〆へまいらせらるゝ 御よねも御礼= 御
⁸³まいり御ちよく十あかる ひめ宮〆御礼=⁸⁴ならせられ候 御としたま=⁸⁵引十てうはく水引百は
 まいる 御ちの人より御ちやわん十上ル 御ミつ〆も御まいりなされ候 すみ十丁あかる お
 さ五よりかき一ゑた上ル ⁸⁶くはんきやういん〆御まいりなされ候 御ふたあかる 〆いかつよ
 りこすき五そくあかる⁸⁷

はる、 六 日

ゆらのみや〆へ御礼=⁸⁸ならせられ候 御ちやわん十あふき五ほんまいらせらるゝ 御ちの人へ
 おわし三百おさしへ^{いまおり}おひ一すちいおりへうねたひ三そくつかわされ候⁸⁹

はる、 七 日

しよけい院よりすきはら十てうすゑひろ一ほんあかる いまてかわより御みやうたいに御ちの
 人御まいりかて〆より⁹⁰しきしふんかう二つまいる 御ちの人よりこんふ二わあかる ⁹²にやくわ
 うし殿より御ちやわん廿御ふたあかる かつ〆より御ちやわん十あかる しんわう〆へ御礼=
 ならせられ候 御としたまに御ちやわん廿御にんきやう一つまいらせらるゝ ひる御ちの人へ
 今おりおひ一すちつかわされ候 夕かたひめ宮〆へ御礼=⁹³ならせられこふんこう二つまいらせ
 らるゝ 小一条〆へ引十てうさかつきのたい一つ御ひめ〆へさけおひ一すち御ちの人へおわし
 五百おさしへ今おりおひ一すちつかわされ候

はる、 八 日

きん中〆しん院御所〆へいつものことく御くわしこんふ十はつゝあかる なかはし〆大御ちの
^{94,44}人あせちとのへいつものことくさけおひ二すちつゝつかわされ候 ⁹⁵女御〆へすきはら十てうは
¹⁹⁵く水引百わまいらせらるゝ うきやう大夫殿へはんし一そくうねたひ二そくつかわされ候 ⁴⁶れ
 いしやういん〆より御ちやわん十まいる 入道〆へ御たる御返しある

はる、 九 日

しよれい=⁹⁷ きん中〆新院御所〆へならせられ候 きん中〆のわか宮〆ひめ宮〆へ人きや
 う二つつゝまいらせられ候

はる、 十 日

はる、 十一日

おかへ殿御礼= 御まいり御くわしふくろ二つあかる ⁹⁸ みしま殿御礼= 御まいりさたう一おけあ¹⁰⁰

かる なかはし¹⁰¹より御返しによしにて金水引二百はあかる

はる、 十二日 少雪ふる

かねやすへ御ちやわん廿つかわされ候 大御ちの人より御返しによしにてかんなへ三つあか
¹⁰¹る 女御¹⁰²より御返しによしにて杉原十てう金入おひ二すちまいる いまてかわへ引合十
¹⁰³てうはく水引百は御返しにまいらせらるゝ 御ちの人へおもし一すちつかわされ候 おみつ¹⁰⁴
¹⁰⁵へさけおひ二すちまいらせらるゝ おさのへおもし一すちつかわされ候 おかつ御礼=御まい
¹⁰⁶りおり物たんさく三組こうろうのはいあかる

はる、 十三日

よしたこくそうへ御まいりあそはされ候 しゆんかう寺もおまいりさたう一おけあかる しん
¹⁰⁷少将¹⁰⁸より御返しによしにてほん二つまいる

はる、 十四日

仙洞³⁶御幸ならせられ候 御みやのよしにて銀子五枚まいる めうもん¹⁰⁹同しん宮¹¹⁰しやうこ
¹¹¹ういん¹¹¹やうとく院¹¹¹ならせられめうもん¹¹¹よりこんふ五わまいる しやうこういん¹¹¹よりす
¹¹²きはら十てう御ちやわん十まいる ろくおん寺¹¹²も御まいりなされ候 しん中なこん¹¹²よりさ
⁸⁰ら廿すき折一つまいる よしかわ⁸⁰大せん⁸⁰八丸⁸⁰御ともにて御まいりなされ候 しん少将⁸⁰
¹¹³も御まいりなされゑん光院¹¹³も御まいりなされ候 あせちとのより御ちやわん廿あかる やう
¹¹³とく院¹¹³よりあふりこはうまいる

雨ふる 十五日

ゑん光院⁸⁰御かへりなされ候 女院御所⁸⁰より御返しによしにて杉はら十てう銀子二枚ま
⁸⁰いる まつい殿おむめ御まいり候 まつい殿より水引五十はあかる さけおひ一すちくたされ候

あさふる ひるはる、 十六日

やうとく院⁴⁰へ御そうにゝならせられ候 みな〜御とも=まいりふせんも御まいり候
¹¹⁴しんわう¹¹⁴よりわらまき一折十五わまいる すなはちゑいかつへつかわされ候
¹¹⁵

雨ふる 十七日 夕かたはる、

いつミ殿へ御返しにおわし五百およねへ今おりおひ一すしつかわされ候 ゑちせんとのへさら
¹¹⁶廿つかわされ候
⁸⁸

はる、 十八日

やうとくいん¹¹⁷御せちにならせられ候 ミな〜も御ともまいられ候 さかみ殿御れいにま
¹¹⁷いりなされ候 きん中¹¹⁸より一かう御たるこんふ一折まいる
¹¹⁸

はる、 十九日

はたゑたへ御れいにならせられ候 御としたまにきんいちふ二百ひきまいらせらるゝ おたき
¹¹⁹おまるへうねたひ三そくつゝくたされ候 ちよきく殿へも人きやう一つおやつへもはりこ三つ
⁵³
¹²⁰

さくさへもんにも上下した〜におはし百つゝくたされ候 ¹²¹ ゑいちしやおすまお七さとへ御かへり候

はるゝ 廿日

ふせん殿御かへり候

はるゝ 廿一日

りしん御まいり候 ¹²² 一もん夕よりしるあめのまけ物二つまいる ¹²³

はるゝ 廿二日

れいしやういん¹²⁴へ御ちの人御れいにやらせられ候 御としたまにくわしこんふ二わすき折一つまいらせらるゝ ひらおか殿へはんし二そくうねたひ三そくつかはされ候

はるゝ 廿三日 少ふる

ゑいちしやお七おすまかいられ候 ¹²⁵ おすまよりあんへいとすこしあかる ¹²⁶

はるゝ 廿四日

はるゝ 廿五日

しよけい院へ御返しに一分一つつかわされ候 ¹²⁷

はるゝ 廿六日

御所へならせられ候 ゑん光院¹²⁸へせいしまめまいらせらるゝ

はるゝ 廿七日

はうき殿へならせられ候 御としたまに百疋くたされ候 ふせん殿御まいり候

はるゝ 廿八日

れいかんし¹²⁸御れいにならせられ候 御としたまに引十てうまいる ⁸⁵ 御ちの人より水引百はあかる ふせん殿かへり候

はるゝ 廿九日

はるゝ 卅日

かてのかうち¹²⁹へ御返しにかんなへ二つまいらせらるゝ にやくわうし殿へ引十てう水引百はまいる きよくりやうさとへかいられ候

(2) [注17] (§105)

47 祢正月…子年の正月（万治3年正月）の意。万治3年は庚子に当る。

48 御れい=ならせられ候…大聖寺の当世の宮様（19世芳桂院久山元昌宮，後水尾天皇の皇女¹³⁰滋子，§ 97 系図参照）が陽徳院様（当時，京都市右京区嵯峨今林の蓮華清浄寺に隠居中の先住）へお礼にお出あそばしましたの意。（写真⑩⑪，§ 100字形表参照）

49 まいらせらるゝ…大聖寺の宮様が陽徳院の宮様へお上げになるの意。（写真⑩⑪，§ 100字形表参照）

50 そきん¹³¹…陽徳院様に仕えていた上臈か。こかわ殿・なかと殿，こんのせう・しゆせい・おまんなどは，いずれも陽徳院様に仕えていた人か。

- 51 かいはりこ…かいばりこ（貝張子）は幼児の玩具。蛤貝を合わせた中へ、鈴を入れたなり子で、貝の上いろいろな布切れを張る。
- 52 なつめはりこ…なつめばりこ（棗張子）はなつめの形をした張りぼてに布切れを張ったもの。
- 53 うねたひ…うねたび（畦足袋）はさらした木綿を絹糸でうねざしにした足袋。
- 54 つかわされ候…大聖寺宮様から陽徳院様に仕えている人々におやりになりましたの意。（写真⑪⑫，§ 100字形表参照）
- 55 こふんかう…小文庫。
- 56 まいる…あがるの意（注58，§ 100参照）。
- 57 はうき殿…伯耆殿は女官名。
- 58 あかる…献上があるの意。
- 59 院御所^⑩…院御所は上皇のおいでになる仙洞御所。ここでは後水尾上皇の敬称。後水尾上皇は当世の宮の父帝（§ 100系図・注36参照）
- 60 すきはら…杉原紙は播磨国揖東郡杉原村の産（一説に美濃国揖斐郡坂内村杉原の産とも）。奉書紙の類で、やや薄く柔かなもの。献上贈答用には鬼杉原（十帖紙とも）を用いた。
- 61 さけおひ…提帯は附帯ともいい、室町時代に禁裏女房の用いた帯。金糸、繻模様、巾7寸、前で結んだ（寛永の附帯の巾は8分）。「後水尾院当時年中行事」下に、「帯は絵様の帯を用、或は、薄のさげ帯也、近年、唐様、染物、縫箔、等のくけ帯をも用、本式にあらず」と。尼門跡の喝色の時には、緋の精好のさげ帯を用いたという。
- 62 しん中なこん^⑩…新中納言^⑩は新広義門院藤国子のことか。なお「新」は先任のあるときに付ける。
- 63 しん少将^⑩…新少将^⑩は女院付きの女官。
- 64 ゑもんのすけ…衛門という典侍。衛門は父兄の官名。
- 65 くはん御なり候て…「還御成り候」はここでは大聖寺の宮様がお帰りあそばしましてからの意。「なり」は敬語。
- 66 かね^⑩…公卿の勘解由小路様。左衛門佐資忠、のち参議。（正月七日に再出，注129参照）。
- 67 おたき少将^⑩…愛宕少将（公卿）。
- 68 れんせい中將…冷泉中將。
- 69 なかその^⑩ひくち^⑩…従三位左中將中園秀定卿・従三位樋口信康卿。
- 70 ゆふふ卿…右府卿（右大臣）。ここでは右大臣徳大寺公信卿のこと。
- 71 小すき…小杉原紙。
- 72 ひらおか殿ふせん殿御きさ…いずれも大聖寺へ出入りの方か。「御きさ」には「どの」がついていないから目下の人と思われる。
- 73 とうせんへい…唐煎餅は唐菓子的一种。
- 74 ゆらのミヤ…玲瓏宮は大聖寺当代の宮と同じく、後水尾天皇の皇子、尊証法親王。生母は新広義門院。青蓮院（京都市東山区粟田口）に入室された。（§ 97—1参照）。
- 75 かやーはこ…櫃の実一箱。
- 76 御ちの人…宮様（ここでは19世芳桂院）の養育係の女官。
- 77 ほん光院^⑩…本光院は陽徳院の宮の生母、西洞院参議時慶の女時子で、平内侍あるいは勘解由の局といった。本光院（京都市北区紫野）はその隠居所である。
- 78 うかいちやわん…この社会で特にうがいのために用いる大きい茶碗。
- 79 その^⑩…園基福、従二位。京極園家は太聖寺当世の宮（芳桂院）の生母の生家。（当時29歳，§ 97参照）。
- 80 ゑん光院^⑩…円光院瑞雲文英尼は円通寺の開祖（後水尾天皇のご生母中和門院の侍女。霊元天皇の乳人）。円通寺は京都市左京区岩倉幡枝にある。なおお文14には「はたえたへならせられ候」とある。（§ 129・お文15，注119参照）

- 81 ミんぶ[㊦]…民部様。
- 82 入道[㊦]…ご隠居様。
- 83 ほんそん御かゝみひらきあり…ご本尊（お釈迦さま）に供えた鏡餅を五日に切る正月の行事がある（正月のお供物は正月三日にさげる）。
- 84 御いわ井やうとくいん[㊦]へまいらせらるゝ…鏡開きの日のお祝い言上に大聖寺の宮様が陽徳院様へお出あそばす。
- 85 引十てうはく水引…引は引合紙の御所ことば。はく水引は金箔の水引のこと。（1月11日に「金水引」とある。）
- 86 かき一糸た…干柿一枝。
- 87 御ふた…御札。
- 88 おわし…おあし、おかねのこと。正月7日に「おはし」とあり、日葡辞書・大上臈御名之事等にも「おあし」とある。
- 89 おさし…御差は宮中の女官の官名で、新婚の人に差図する既婚の婦人をいう。
- 90 いまてかわ…権中納言今出川公規。
- 91 しきしふんかう…色紙を入れる文庫。
- 92 にやくわうし殿…若王寺殿。今の若王寺神社（京都東山の麓にある熊野権現の末社の一つ）。
- 93 さかつきのたい…盃の台。
- 94 きん中[㊦]…後西天皇（注44参照）。[㊦]は上達部以上に用いる。なお後には陛下に「様」（たてさま）、上達部以上には「[㊦]」（丸さま）、それ以下にはかな書の「さま」と身分による区別が行なわれるようになったが、この時代は草書体をよしとする風があり、この日記にもほとんど[㊦]（丸さま）を用いてある。
- 95 なかはし[㊦]…長橋局。宮中奥の権力者。（§25-2の74参照）。
- 96 大御ちの人…お上（ここでは後西天皇）のお乳の人をいう。
- 97 しよれい…諸礼。交際・諸儀式に物事の扱い、坐作・進退など一切の礼儀作法。
- 98 おかへ殿…命婦の名か。
- 99 御くわしふくろ…御菓子袋。昔はお菓子を袋に入れ、袋の口に水引をかけた。
- 100 みしま殿…三島という国名をもつ命婦の名。
- 101 かねやす…かねやすという医者か。
- 102 かなへ…爛鍋。酒の爛をするための鍋。
- 103 金入おひ…キンイリオビは金糸の入った帯。
- 104 引合…ヒキアイは檀紙のしわのないもの。後には檀紙と混じて同名となる。
- 105 おもし…帯の御所ことば。（§25-2参照）
- 106 おり物たんさく三組こうろうのはい…織物・短冊三組・香炉の灰。
- 107 よしたこくそう…京都吉田虚空蔵。
- 108 ほん…盆。
- 109 御みやのよしにて…御みやげとして。
- 110 めうもん[㊦]…妙門[㊦]。妙法院門跡（堯恕法親王、父は後水尾天皇、母は新広義門院）のこと。（§97参照）。
- 111 ろくおん寺[㊦]…鹿苑寺（金閣寺）の住職。ここでは、御水尾上皇の御外戚の勸修寺晴豊の子、鳳林承章のこと。
- 112 八丸[㊦]…「丸」のつくのは堂上華族の幼少者。
- 113 あふりこはう…焼きごぼう。（これに味噌をつけることもある。）
- 114 わらまき一折十五わ…わらで巻いたもの十五わ入り一折。中へは柿・ごぼう・山の芋等を入れた。
- 115 すなはち…すぐに。
- 116 いつミ殿…命婦の名。和泉か。
- 117 御せちにならせられ…お節会のおひるのご飯（おひるのゴセン）にお出あそばされ。
- 118 一かう…一合。ふたものの箱一つ。
- 119 はた糸た…幡枝の円通寺（注80参照）。

- 120 ちよきく殿…千代菊 (幼名)。
 121 ゑいちしやおすまお七さとへ御かへり候…「さとへ御かへり候」の記事からみて、ゑいちしや・おすま・お七は大聖寺の常勤者 (§ 34参照)。ゑい侍者 (「ゑい」は尼さんの名、侍者は僧階)。おすま・お七は女中か。
 122 一もん[㊦]…奈良の一乗院門跡様の略称。ここでは真敬法親王のこと。後水尾天皇の皇子登美宮。生母は新広儀門院。
 123 しるあめ…水飴。
 124 くわしこんふ…菓子よの甘い昆布。
 125 かいられ候…「かいられ」は「かえられ (帰)」のなまりで、里帰りから「かいられ」の意。
 126 あんへいと…あるへい糖か。
 127 一分一ツ…一分銀を一枚。
 128 れいかんし…靈鑑寺は谷御所と称し、京都市左京区鹿ヶ谷にあり、臨濟宗。(注 148, § 142~144参照)。
 129 かてのかうち[㊦]…勘解由小路様。左衛門佐資忠。(注66参照)。

3. 宝鏡寺御日記万治三年一月 (§ 106)

(3) 本 文 (§ 107)

正 月

元 日 はるゝ

わかゆの御行水まいる それより
¹³⁰
 御きつしやうあそはし候 うらお
¹³¹ ¹³²
 もてのちんしゆへ御まいりつきに
 御きやくてんへならせられ候 し
¹³³
 ゆくしんつきにしゆしやう有 く
¹³⁴
 はん御なり候て御くちいわ井有
¹³⁵
 ミな〜へも下さるゝ 大ふくい
¹³⁶
 てつきにひしはなひら出る 御さ
 うにいてすきの御せんいつる ふ
 くさの御せん出る ミな〜へ御
¹³⁷
 とをり下さるゝ うこんさ日やう
 へ九良ゑもん御礼にまいらるゝ
 御さかつき下さるゝ さきやうう
 ゑもんでんひやうへ御礼にまいら
 るゝ 御さかつき下さるゝ せい
 しん御礼にまいらるゝ 御さかつ
 き下さるゝ

二 日 はるゝ

行事きのふに同 つちへゑかう有
¹³⁸ ¹³⁹
 やうさんへはんさい有
¹⁴⁰



⑩ 宝鏡寺万治3年1月1日御日記

御いわ井もきのふに同 御さかつき下さるゝ 御かゝミ御いわ井あそはし候 あわち御礼にま
 いらるゝ 御さかつき下さるゝ 院御所³⁶⁻⁵⁹女院御所⁴⁶あけの宮様へ御礼にならせられ候 御
 とも御ちの人御さふらひ衆ハさこん八さへもん八良ゑもん八良さへもんうこん也 くしけとの¹⁴²
 御礼= 御まいり 御すのうち= はんにちんしゆふきんあり¹⁴³

三 日 はるゝ

きやうもきのふに同 そしへゑかう有 しゆん長らうへはんさいあり¹⁴⁴
 やうりんあんすいけ院¹⁴⁵御礼に御まいり御さうにいて御さかつきいつものことくいつれも長に¹⁴⁷
 有 けんやう御れいにまいらるゝ 御さかつき下さるゝ おりんまいらるゝ 御さかつき下さ
 るゝ たにのつしま御礼にまいらるゝ 御ないき¹⁴⁸= て御大めん御さかつき下さるゝ きやうふ¹⁵¹
 との御礼に御まいり御さかつき有 のゝ見や將との御礼に御まいり御ないきにて御さかつき有
 しなの御れい= まいらるゝ 御さかつき下さるゝ むめかうじ左ひやうへの御まいり御さか
 つき有 ふしきかゝ同たしま御礼にまいらるゝ 御ないきにて御大めん御さかつき下さるゝ¹⁵²

四 日 はるゝ よるゆきふり

きやうの御事きのふに同 くわとくへゑかう有 にしの京おたつ御礼にまいらるゝ 御さかつ
 き下さるゝ みくしけ¹³⁹⁻³よりとちのかちんまいらせられ候

五 日 はるゝ

きやうの事きのふに同 いたてんへゑかう有 いつものことく御ひやくしやう御礼にまいる¹⁵³
 いつれも長に有 まんさんへゑかうならせられ候 みくしけ¹⁵⁴よりかつらあめ十五くり見つか
 んまいらせられ候 御かうしん¹⁵⁵の御なて物御あらいよねまいらせられ候 せいさんむすめ御
 礼にまいらるゝ 御さかつき下さるゝ 蔵しゆんとの御しうきまいらせられ候¹⁵⁷

六 日 はるゝ

きやう事きのふ= 同 ふあんへゑかう有 けいかう院¹⁵⁸御さとへ御礼に御かへり同御まいりお¹⁵⁹
 山よりあかり候折一つまいらせられ候 きん中¹⁶⁰⁻⁴⁴へ御礼の御たんかう= みくしけ¹⁶¹へ御ちの
 人まいらせられ候 しゆけい御礼にまいらるゝ せいかんし大なこんとのたかつかとの御礼に¹⁶²
 御まいり みくしけ¹⁶³へやせより上ル□なつとおはまいらせられ候

七 日 はるゝ

みくしけ¹⁶³⁻²へ御ミまいに文まいらせられ候 ミくしけ¹⁶⁴より御かへしまいらせられ候 御つか
 いおよし御さうにいて御さかつき下さるゝ 吉長らうてつしゆそ久しゆそ御礼= 御まいり御さ
 うに御すい物いて御さかつき下さるゝ おゆき御礼にまいらるゝ 御さかつき下さるゝ 御ち
 よより御としたままいらせ候 しなのめし= まいる すなはちまいらるゝ 御はりあそはし候¹⁶⁴

八 日 はるゝ

せんしゆ院¹⁶⁵へはんさい有 しん女寺へならせられ候 御とも= ミな〜いつものことくれや¹⁶⁶
 うそく下さるゝ せいかんし一位との御礼に御まいり御おもて= て御大めん御すい物いて¹⁶⁷

御さかつき有 やうりんあんすいけ院¹⁶⁸しやうこくしへ御かへし有 ないきとの御礼に御まい
り御すい物いて御さかつき有 そのいけとのへ御返し有 きん中¹⁶⁹へ^{御しよ}あすハ御礼ニて御しう
きまいらせられ候 ¹⁷⁰

しん院の御所⁴⁵へも御しうきまいらせられ候 しなの御はりにまいらるゝ
みくしけ⁴⁵へ御ミまいに八良ゑもんまいらせられ候

九日 はるゝ

せいわ院たすけつしまへ御返しとも有 れつしゆそ御礼にまいらるゝ あたこけうかく院より
¹⁷¹御ふたまいる 御はつを十疋つかはされ候 さき御ちの人きちまつたまるおいちまいらるゝ
やなきのはし御礼にまいらるゝ 御ふた色⁸⁷〜あかる めうれんおきち御礼にまいらるゝ 御
たいめんニて御さかつき下さるゝ 九良ゑもんへ御返し有

十日 はるゝ

御きやう水あり せい¹⁷³かんし中なこんとの御礼に御まいり御おもてニて御大めん御さかつき有
ゆうき御礼にまいらるゝ 御大めんにて御さかつき下さるゝ しなの御はりにまいらるゝ み
くしけ⁴⁵へ御見まいに八良ゑもんまいらせられ候 御ひやくしやうとも御礼に上る どれも
長に有

十一日 はるゝ

みくしけ⁴⁵へ御見まいに八良ゑもんまいらせられ候 御くらひらきニて左ひやうへうこんまい
らるゝ 御くらへ御みき御こんふかやかちくりあたこの御ふたくらま御ふた御てうしひさけニ
てまいる すなはち^{御とおりにて}御さかつき下さるゝ 女御¹³⁷宮〜¹⁷⁴かた御としたままいらせられ候
御ちの人より大御¹⁷⁶ちの人てわきやうふ卿丸¹⁷⁷おへとしたままいる みくしけ⁴⁵よりひしほしやき
んまいらせられ候 ミきより御しうき上る にしの京おたつへ御返し有 御ちの人御かゝみひ
らきニて御さうに有 丈蔵¹⁷⁸すとの御礼に御まいりじゆせい¹⁷⁹とう御礼に御まいりとれも御さかつ
き下さるゝ ¹⁸⁰

けい里院⁴⁵より御しうきまいらせられ候 かしわへ御返し有

十二日 はるゝ

しなの御はりニまいらるゝ

十三日 はるゝ

みくしけ⁴⁵へ御ミまいニ文まいらせられ候 その御返事ニ御ふたともまいらせられ候 こ両き
たのいまみやへ御まいりあそはし候 二てうおくま御礼にまいらるゝ 御さかつき下さるゝ
かわしまかいつ御礼にまいらるゝ 御さかつき下さるゝ 女御⁴⁵より御返しまいらせられ候
ミなミの御所へはしめてならせられ候 いつものことくさくしゆそへせに式百文下さるゝ せ
いしんへ御ちの人礼につかはされ候

十四日 はるゝ

御きやう水有 けい里院¹⁸²へ御返し有 しゃうけいてらへ御返し有 さとのかミへいつものこ
 とく御しうきつかはされ候 御つかいあはちミなミの御所ノハ八さへもんいつれも御まつじ御
 しうのもまいる 御うたいそめ=てめおう大夫一人さるかく一人まいる 九ひやうへうこんて
 んひやうへ左京まいらるゝ じゆせいふけいもまいらるゝ

十五日 はるゝ ひるより雨ふる

しゆくしん有 きん中¹⁸³ 新院の御所¹⁸⁴へ御礼にならせられ御事おうかゝいに文まいらせ
 られ候 御かいすき候てから御さぎんてう有 女院の御所¹⁸⁴へ御返し= 杉原十帖銀子二枚ま
 いらせられ候 すなはち御返事有

十六日 はるゝ

大ねんふつ有 みくしけ¹⁸⁵へ御見まい= まいらせられ候 それよりそのいけとのへもまいらせ
 られ候 御まん御れう人より御とし玉まいられ候 御日まちあそはし候 せいしんまいらるゝ
 ミくしけ¹⁸⁶へ御ミまいに八良ゑもんまいらせられ候¹⁸⁷

十七日 雨ふる

きよ水へ御まいり御行水あそはし候 あつきさとへかへらるゝ¹⁸⁸

十八日 ゆきふる

くはんおん御戸あらひよねまいる きん中¹⁸⁹新院御所¹⁹⁰へ御礼に御成御とも御ちの人御さふ
 らひ衆さこん八さへもん八良ゑもん八良さへもん也 くはん御にミくしけ¹⁹¹へも御ミまひにな
 らせられ候 きん中¹⁹¹より御たる御返しあり 御ちの人へも下さるゝ ミくしけ¹⁹²よりふた
 八ツまん七ツまいる
 やた御いとま申候 金壺分一つ下さるゝ さるかく一人へかミ二そくたひ一そく下さるゝ た
 ゝしこれへれいなし¹⁹³

十九日 はるゝ

御ちの人ゑりんハやたへまいらるゝ ミくしけ¹⁹⁴御ミまひに文まいらせられ候 あせちとの心
 あしくてミまひに文まいる 大御ちの人へも文まいる 御ひともまいる てわ¹⁹⁵もかいきけに
 て文まいる けんやうへ御丸やくとりにまいる ミくしけ¹⁹⁶月々の御ふたはこ二ツまいる¹⁹⁷
 よしたへ御ふたともおさめにまいる さへもん^{〔おん人カ〕}まいる あつきさとよりかへる

廿日 はるゝ

こ光めう院へはんさい有 こく長らうへもはんさい有 いわささとへかへらるゝ みくしけ¹⁹⁸
¹⁹⁹へ御ミまいに文御ちうの内まいらせられ候 二てう御くまとさ御返し下さるゝ ミつ丸との²⁰⁰
 御ちよ御礼に御まいり

廿一日 はるゝ

さかのしゆゑんさき御ちの人へも御かへし下さるゝ それより 御もんせき¹⁴²へも御ミまい
 に文まいらせられ候 くしけとの御ちの人御礼にまいられ候 それよりみくしけ¹⁴²へ御見まい

にまいらせられ候 御かへり¹⁶⁵ = とちのかちん一つまいらせられ候 しん如寺御じゆう寺かわり
 = て金²⁰¹長らう御てしてんせいとう御礼にまいらるゝ 御しうきにあふきはこ上ル 御ひまいら²⁰²
 せられ候 御大めんなし

廿二日 はるゝ

とくよりみくしけ²⁰³へ御見まい = まいらせられ候 御せんあかり候てから
 みくしけ²⁰⁴へ御ミまいにならせられ候

廿三日 すこし雨ふる はんに大雨ふる

あたこへ御大まいりに久三良まいる
 みくしけ²⁰⁴へ御ミまい = 八良ゑもんまいらせられ候 御ちの人より御ふるまい有 いせつかは²⁰⁵
 よりすゝきわかめ一はこせうのたわら上ル 御ふくまいらるゝ ミくしけ²⁰⁶へ御見まいに八ゑ
 門まいらせられ候

廿四日 はるゝ

みくしけ²⁰⁹へ御見まいに御人まいらせられ候 御返事²⁰⁷ = やわたより御かう水御かう御ふたまい
 らせられ候 みふの御ぢさう²⁰⁸うけにまいる
 みくしけ²⁰⁹へ御見まいにあかのく御御そへおかす御ちの人にもたせられ候 御所のみきゑんに²¹⁰
 つき候とて御いとまこひにまいらるゝ さかつき下さるゝ 又壺分一つ下さるゝ 御ちの人よ
 りもとゆいかみ五枚まいる 大御ちの人きあいあしく候てみまいにまいらせられ候 ひしほま²¹¹
 け物一つあわのひしほまいらせられ候 ²¹²うへ²¹³よりつけわらひまけ物一つひしほま¹⁷⁸け物一つま
 いらせられ候

廿五日 はるゝ

御きちゑんつきの御しうき = 平おりおひ一すち下さるゝ 御ちの人より丸わたほんほりまいる²¹⁴
 みくしけ²¹⁵へ御ミまい = ならせられ候 御るすの内¹⁶⁷ = せいかんし一ゑとのへ御かへしことしよ
 りまいらせられ候 ゑりんさとへかへる 御さのさと¹⁶⁷かへる くれにてくわん御成まいらせ
 られ候 御ちの人御むかい = まいらるゝ

廿六日 はるゝ

こよせ院へはんさい有 みくしけ²¹⁶へ御見まい = まいらせられ候 御せんすき候てからみく
 しけ²¹⁷へ御ちの人御ミまい = まいらせられ候 けいかう院²¹⁸へならせられ候 夕御せんあけな
 され候 ゑいちしやとのはしめミな²¹⁹御ともにてまつ山御礼にまいらるゝ 御さうにいて御
 さかつき下さるゝ

廿七日 はるゝ

みくしけ²²⁰へ御見まいにまいらせられ候 御きやう水あそはし候 御所へならせられ候 御る
 すの内にけいかう院²²¹御かへりけんやうまいらるゝ いわささとへかへる ゑりんかへる く
 れにてくわん御成まいらせられ候 御ちうの内まいらせられ候

廿八日 はるゝ

みくしけ²¹⁶へ御見まいに八良²¹⁶ゑもんまいらせられ候 すいけ院²¹⁶よりせいけん御礼にまいられ候
れつじゆそへ御しうきつかはされ候 大御ちの人へ見まいに御人⁴⁶まいら⁴⁶せ
らう⁴⁶くミまいらせられ候 いなのよりおきち²⁵¹いわ井あかる

廿九日 はるゝ

けんやう御見まいにまいらるゝ みくしけ²¹⁶へ御見まいにならせられ候 きん長らう御礼に御
まいり御るすの内にて御大めんなし くれにてくわん御成まいらせられ候 しや¹⁷⁹きん五つまい
らせられ候

卅日 はるゝ ひる²¹⁶雨ふる

みくしけ²¹⁶へ御見まいに文まいらせられ候 御やしきのおはまいらせられ候 大御ちの人て
わとミ御ちの人へも御やしきのおはつかはされ候 ミくしけ²¹⁶より火のゆ²¹⁶うぜん御きとうの御
ふたまいらせられ候 御ちうの内もまいらせられ候

(4) [注18] (§ 108)

- 130 わかゆの御行水…新年の清めの行水。
- 131 御きつしやうあそはし候…21世高德院宮様が御吉書（年頭の書きぞめ）を遊ばしました。
- 132 うらおもてのちんしゆ…宝鏡寺の裏の鎮守と表の鎮守（鎮守さんには現在では稲荷大明神・八島大明神・福松大明神を祀る）。
- 133 しゆくしん…祝聖。天皇御誕生日・元旦・毎月朔日に、禅寺で行われる聖寿無窮を祈る法要。
- 134 しゆしょう…修正。元旦から5日まで行う玉体安穩を祈る修正会のこと。（§ 74参照）。
- 135 御くちいわ井…参賀の人に、宮様手ずから昆布とかちぐりを賜わること（§ 64参照）。
- 136 大ふくいてつきにひしはなひら…「大服」は大服茶の略、「ひしはなびら」は菱餅。
- 137 御とをり…お祝のごぜんのこと。お湯殿の上の日記にも「おとこたち御とをり」（慶長3年1月3日）等用例は多い。
- 138 行事きのふに同…正月の行事はきのうの行事（元日の「わかゆの御行水…しゆしやう有」と同じ）。
- 139 つち（139-1）・そし（139-2）・くわとく（139-3）・いたてん（139-4）・ふあん（139-5）…禅宗では正月2日につちさん（土地の守護神）、3日に祖師（達磨大師・臨濟禅師・百丈禅師）、4日に火徳（火の守護神）、5日に韋駄天（食物の守護神）、6日に普庵（建物の守護神）をそれぞれまつる。
- 140 やうさんへはんさい有…宝鏡寺第18世の耀山^{ようざん}尼長老へご命日のお勤めがあるの意。半齋は命日の当日の勤行をいう。（お逮夜を「宿忌」というのに対して）。
- 141 あけの宮²¹⁶…朱宮（俳宮とも）、光子内親王、法名を元瑤と号す。宝鏡寺の宮の妹宮で後水尾院の皇女。生母は蓬春門院。寛永11年7月1日誕生。天和2年2月、林丘寺門跡を創建。享保12年10月6日薨去、御年94。一集院葉山に葬る。（§ 97—1, 注141参照）。
- 142 くしけとの…蓬春門院の父、榊筒隆致朝臣。（§ 97—1参照）。
- 143 ふきん…^{ふきん}諷経。看経に対して、声を出して読む禅家の仏前の勤行。
- 144 しゆん長らう…宝鏡寺17世中興花屋理春尼長老、近衛尚通公の女。
- 145 やうりんあん…養林庵は宝鏡寺の末寺。
- 146 すいけ院…瑞華院は宝鏡寺の末寺。
- 147 長に有…帳に有。長は帳の略体。宝5日に再出。
- 148 たに…たに（谷）は谷御所（靈鑑寺）のこと。（注128・322参照）。

- 149 御ないき…御内儀は「表」に対する「奥」の意。
- 150 御大めん…「御対面」の当て字。
- 151 きやうふ…刑部（刑部省の長官）。
- 152 同たしま…同但馬。ふしきかゝ（伏木加賀）の守の子か。
- 153 御ひやくしよう…御百姓。宝鏡寺領内の小作人たち。
- 154 かつらあめ…桂飴。足利時代から桂（京都市右京区）でつくったといわれている棒飴。
- 155 御かうしん^②…三宝荒神。かまどの神。
- 156 御なて物…御撫物。祓の具。身をなでて、けがれや禍を払いすてるための紙製の人形または衣服。
- 157 おあらいよね…お洗米。
- 158 けいかう院…繼孝院。宝鏡寺の上藤寺（京都市上御霊通り新町東入ル）。けいかう院殿はその住職。
- 159 お山よりあかり候…繼孝院に上った一折を宝鏡寺にさし上げられたのである。
- 160 きん中^②…後西天皇。なお天皇を敬って抬頭してある。（注44参照）。
- 161 御たんかう…御談合。話し合うこと。バジェスの日仏辞書に「dancō ダンカウ カタリアワスル」とある。
- 162 せいかんし大なこん…清閑寺（セイガンジ）大納言共綱、当時49歳。共房の子。なお寺名の時は、誓願寺（セーガンジとアクセントで区別している由）。（注167・173参照）
- 163-1 お葉。葉の御所ことば。
- 163-2 みくしげ^②へ御ままい…七日以降、みくしげ様（注39参照）へお見舞の記事が多いので、ご病氣中と思われる。
- 164 御はり…病氣治療のお針。
- 165 しん女寺…真如寺。宝鏡寺の宮代々の御墓所（京都市北区等持院）。「しん女寺」の「女」は「如」の当て字。
- 166 れやうそく…料足。銭の異名。
- 167 せいがんし一ゐとの…清閑寺一位殿。共房、従一位、当時72歳。（注162参照）。
- 168 しゃうこくし…相国寺。宝鏡寺では相国寺の長老から受戒した。
- 169 そのいけとの…従二位園池宗朝のこと、当時50歳。
- 170 御しよ…御書。あすお礼にまられる前に、御書がまいったということであろうか。
- 171 せいわ院…清和院（京都市上京区七本松一条上ル観音寺町）寄宿の女官か。
- 172 あたこけうかく院…愛宕敬学院。
- 173 せいかんし中なこん…清閑寺中納言熙房^{ひろふき}、正三位、共綱の子。（当時28歳）。（注167参照）。
- 174 御くらひらき…正月11日の御蔵開き。（12月31日にお蔵おさめをする）。
- 175 ひさけ…提子は銚子の補助に用いられた金属製の酒器。
- 176 大御ちの人てわ…陛下のおちの人の出羽。（注196参照）。
- 177 丸お…丸尾か。
- 178 ひしほ…醬^{ひしほ}。味噌風のもの。
- 179 しやきん…砂金。
- 180 じゆせいとう…じゆ西堂。じゆは人名の略称。西堂は住持を補佐する僧侶のうち、上位者の位階。
- 181 こ両きたのいまみや…御霊神社（京都市上京区御霊堅町）と北野天満宮（京都市上京区馬喰町）と今宮神社（京都市北区紫野今宮町）。
- 182 さとのかみ…佐渡守。京都所司代。
- 183 御かいすき候て…御会が終わってから。
- 184 御さぎんてう…御左義長（御三稔杖の略）。正月15日または18日に青竹を束ねたて、扇子・短冊などを結びつけたものを焼く行事。ただし宝鏡寺では正月15日に行なった。
- 185 大ねんふつ…大そうなお念仏の意。（宝鏡寺の行事、小念仏に対していう。この日に宮中でも念仏百万べんなどがある。）

- 186 御まん御れう人…おまんという名の、公家の息女か。御寮人は人の息女や妻の尊称。
- 187 御日まち…日待（日祭とも）。前夜から潔斎し、翌朝の日の出を待って日の神を拝むこと。1月・5月・9月の各吉日に行う。「まち」は「まつり」の意。
- 188 きよ水へ御まいり…京都清水観音の命日は17日であるので、その日に清水へお参りしたこと。
- 189 くはんおん御戸あらひよねまいる…観音さんのお扉の前に、洗米をお供えする。
- 190 御さふらひ衆…御侍衆は宝鏡寺の宮の表の侍の人々（当時、左近・八左衛門・八良衛門・八良左衛門などがいた。§ 34参照）。
- 191 くはん御に…宝鏡寺の宮様が還御の途中に。
- 192 ふた八ツまん七ツ…広蓋にのせたもの八つと饅頭七つ。
- 193 これハれいなし…猿楽の人に物を与えられることは前例がないとの意。
- 194 やた…京都矢田地蔵（現在は京都市中京区通三条上ルにあり、浄土宗西山派）。ここはお乳の人がご代参したこと。（§ 124, お文10参照）。
- 195 あせちとの心あしくてミまひに文まいる…按察殿がご病気なので、その病気見舞のお文を宝鏡寺の宮から下さった。按察は内侍以上の女官名で、後水尾院に仕えた人か。（§ 117, お文3, 注247参照）。
- 196 てお殿…出羽殿。御所の女官名。（注176, § 115, お文1参照）。
- 197 かいぎけ…咳気けは風邪気味のこと。（京都はじめ近畿・中部の一部に方言として残存）。
- 198 こ光めう院…後光明院。111代の天皇、後水尾天皇の皇子。（§ 97参照）。
- 199 こく長らう…克長老か。
- 200 ミつ丸との…みつ丸殿。「丸」は堂上以上の子息につける。
- 201 金長らう御てしてんせいとう…金長老のお弟子の「てん」という西堂。
- 202 御ひ…帯。
- 203 とくより…疾くより（早くから）。
- 204 あたこへ御大まいり…京都の愛宕権現へご代参。「大」は「代」のあて字。（§ 99参照）。
- 205 いせつかはよりすゝきわかめ…伊勢の「つかは」という人から進上の濯ぎわかめ（鱸とわかめとも）か。
- 206 せうのたわら…上納米の俵。
- 207 やわた…八幡（京都府綴喜郡）の石清水八幡宮（§ 121, お文7, 注207参照）
- 208 御かう水御くう御ふた…ご香水（仏前に供える水）・お供物・お札。
- 209 みふの御ちさう^②…壬生寺（京都市中京区壬生^{たぎ}ノ宮町）の地藏様（昔、洛陽の六地藏の一つ）。
- 210 見きゑんにつき…「みき」という人が縁づき。
- 211 もとゆいかミ五枚…元結と紙五枚。
- 212 きあい…気分。
- 213 うへ^②…宝鏡寺の宮様。「うへ^②」は宮様以上の当主をいう。
- 214 丸わた…丸綿帽子の略。
- 215 ほんほり…ぼんぼり型の扇。
- 216 れつじゆそ…「れつ」という首座。首座は禅宗六頭中の第一位の役僧，第一座とも。

Ⅲ 尼門跡関係のお文（§ 109）

1. 解説（§ 110）

(1) 解説（§ 111）

ここに記載したお文は、明暦ごろを中心にし、参考として、明治以降のお文を添えたものである。現存する尼門跡の御日記の紙背文書中、最も古いものは宝鏡寺に残存する慶安元年【(1648年)】の御日記の紙背文書である。が、江戸初期のお文として、ここでは主として明暦3年

(1657年) 1月から6月に至る宝鏡寺御日記の紙背文書(37通から15通を選ぶ。大型の楮紙使用, § 114~129参照。)を中心に掲げた。お文は御日記より少くとも一年前ごろのものであろうと思われ、多くは御所から宝鏡寺の宮(当世の宮は、慶安時代は20世仙寿院宮, 明暦・万治は21世高德院宮)へあてたものであり、ご生母みくしげ様(注39参照)関係からのものが多い。

明治以降のお文(二枚重ね奉書使用)では、大聖寺はじめ5ヶ寺から宮中へのお文、宮中から大聖寺はじめ5ヶ寺へのお文、その他、宮中女官間のものである。明治以降のお文は、江戸初期のものに比較して、一般に書式が形式化され、その内容も理解が容易になってきておる。また陛下へのお文や陛下のお沙汰書もあり、陛下に対する用語法がみられる。たとえば「御揃被遊」の「御揃」とは、天皇・皇后両陛下お揃いの意で、「被遊」と「被」のつくときは宮様以上に限って使い、「御揃被遊」「御機嫌御伺」等の語句は行頭に認める。ところが、明暦3年の紙背文書には、そのような形式化はあまり顕著でない。

ここに記載されているお文の様式としては、堅文(§ 115・写真⑩)・折り紙(二つ折り, § 113・写真⑪, § 118・写真⑫)があり、それにはちらし書きのものとそうでないものがある。(たてぶみのちらし書きを「たつちらし」—§ 116・写真⑬—, 折り紙を「二つ折り」, そのちらし書きを「よこちらし」—§ 113・写真⑭—, と大聖寺ゴセンは呼ばれ、ちらし書きの方がそうでないものより重い時に用いる由)。さらにお文には「うわ包」を用いるのが普通であるが、簡略の場合にはこれを用いず、「結び文」とする。(§ 111・写真⑮—2参照)。

なおここに掲げたお文の冒頭句の書式としては、次のようなものがある。(§ 112「お文を書くときの注意」参照)。

- ① 直接用件をはじめから述べる場合。「ちか〜の御せつく= てめてたさとなたもをなし」(§ 118・文4), 「けふの御きくわためてたく」(§ 116・文2)。
- ② 仙洞^々やみくしげ^々からの申入れを述べる場合。「ミくしげ^々よりたゞいま申との御事= て候」(§ 122・文8), 「仙洞^々より申入候」(§ 127・文13)。
- ③ 返事の場合。「御所^々おほせのよし= て御ふみのやうかたしけなく」(§ 115・文1), 「文のやう日ろう申まいらせ候」(§ 117・文3), 「よくそ御人まいらせられ候」(§ 119・文5), 「文くハしく思日まいらせ候」(§ 123・文9)。
- ④ 一般化した場合。冒頭の句が形式化している。「一ふて申入まいらせ候」(§ 126・文12)。

なお冒頭句ののちに、ご機嫌伺い、差出人の仕えている主人のこと、つづいてお互同士のあいさつに及ぶ。そこで一旦「(めてたく)かしく」のような書き留の句(返す書きの前に置く, § 115・文1・注230, § 113写真⑯の五番)を用い、書き手の私用は返し書きで示し、そのはじめに、「返々」, 「なを〜」等の句を用い(§ 122・文8), 「(めてたく)かしく」(§ 115・文1, § 113写真⑯の二十四番, § 148・文29)で終わる。その他の文中の「かしく」(§ 115・文1の最初の「かしく」)は文脈とは関係のないものである。(なおこの文中の文脈とは無関係の「かしく」は明治以降のお文には使われていない。§ 145参照)。

お文(江戸初期のもの)にあらわれる差出人とあて名人を整理すると、次のようである。差出

人には、みくしげ様に仕える「いなの」(注251, 宝28日参照)が最も多く、みくしげ・大御ち・かつ御ち・あせち・ちよ・あさた・いせ・おさえ・つた・さい。あて名人には、「たつ御ちの人」が最も多く(「たつ」は宝鏡寺21世高徳院宮のお乳の人と思われる。注239参照), また, あちや御ちの人, 宝鏡寺, 上ろう御中, かつしき御中, 宝慈院(注250参照)のようなものがある。

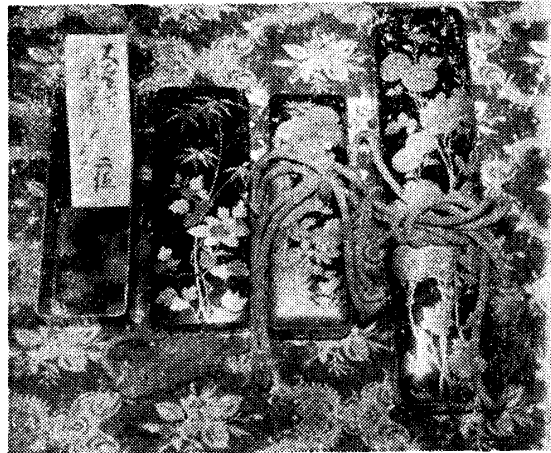
差出人やあて名のないお文には、「うわ包」にそれが記されたか、それを要しないほど自明の間柄のお文であったとも思われる。または、このお文を日記に利用の際、たち切られたためのものもあろう。

ここにみられる差出人やあて名人からも分るように、尼門跡ご自体や御^{みくしげ}匣様が直接お文を認めたり(文13, § 127), また直接にあて名人になることは少なく、多くはそこに仕える人が間接に通信しあっている。たとえば、お文の書き手は「いなの」のように、みくしげ様に仕える者であり、みくしげ様が直接お書きになることは少ない。従って、あて名と脇付けは「たつ御ちの人 ぐ まいる 申給へ」 (§ 118・文4), 「かつしきの御中 まいる 申給へ」, 「上ろうの御中 御日ろう」のように、あて名の人から宮門跡に対して、ご披露を依頼することばが脇付けにされている。

なお「お文の折り方」 (§ 111-2) などは、大聖寺ゴゼンの談によると、次のようである。

「折り紙」(二つ折, 写真⑩・⑪・⑫) は、まず紙の縦を二つ折りにし、それを横に三つ折りにし、さらにそれを三つに折る。それを包み紙に包み、その「うわ包」の表に、たとえばあて名を「典侍鍾子 同津根子 へ 人々申給へ候」のように書き、その下に差出人「大聖寺慈栄 宝鏡寺周禅…」のように書き、うわ包の裏に「封」とをを書く。(§ 146・写真⑬, ⑭-2参照)。明治以後戦前までのお文はこの折り紙(二つ折)が普通であった。

「結び文」(写真⑭-2参照) は二つに折ってから、それを次々に巻いていき、上のところを結んで封じる。本稿所掲の明暦3年の紙背文書のたてぶみは、あて名が用紙の中ほどの高さから書きはじめてある点からも、その多くは結び文であったかと思われる(写真⑯・⑰・⑱参照)。



⑩-1 小文箱 同左 大文箱



⑭-2 あて名(折り紙) 同左(折り紙) 結び文 うわ包

その文は文箱(写真⑩—1参照)に入れ、文箱の紐の結びめには、札紙と御封をつける。札紙には、あて名を記す。それをお使い番が使者として届け、多くはその場で待っていて返事をいただくが、晴れの場合には改めて別に使者を立て、返信を持参する。(宝7日、注163-2参照)。

なお、このお文の読解に当って、一部分不明箇所があるが、それは宝鏡寺で、お文のうらを日記に用いた際、紙の上部と左・右横の部分などをたち切ったためでもある。

次に、お文を書くときの注意 (§ 112) (大聖寺前住職の樋口慈綱さん筆)と折り紙・散らし書の書き順を示す手本 (§ 113・写真⑩)とを掲げることにする。

(2) お文を書くときの注意 (§ 112)

この覚え書は大聖寺25世樋口慈綱さん (§ 30参照)が上臈時代に、当寺から御所向きへのお文を認めるときに注意すべきことを書き留めておかれたものである。

これには大典侍様・長橋局様あてや両陛下・仙洞御所様への文言を記し、さらに結び文や下臈の人への文言にまで及んでいる。

(なおこの覚え書には、その最初に「御花見御能ふに召され候御したひの事」があるが、これは割愛する。)

自分往来の文の事認とりわけかね候

時気一とをり弥」御機嫌よく成らせられ候 折からの」御障り²¹⁷もあらせられず」夜中もよく」御格子成まいらせられ候 御ひる成まいらせられ候ても」御機嫌よく朝夕の御膳にも」毎もの御とをりに御手附参らせられ候」 御沙た共とめて度忝りまいらせ候 猶また」伺ひ申入度さ弥御万衛²¹⁸にも」御障りもおはしまし候はず候御事と」めて度さ猶承り度さ左様=候へは」何〜の用向候ハ、夫認候て」御礼の事候ハ、夫〜認候て」御序の節よろしく御沙たの御事」御頼申入まいらせ候 めて度かしく

大すけ²¹⁹

名

長はし²²⁰

人々²²¹申給へ候

御所 仙洞様 両御所への文言は

御序の節²²²御さたの御事」御頼申入候と認候

他御所〜へは

御さたと申事認申さず候」よろしく御申入の御事御頼申入候

夜分の御格子と認候事も」両御所にかきり候事=承り居候

他御所向ハ

夜分もよく御寝成」参らせられ候や伺ひ申入」度存まいらせ候

年々正月しめ明後

御²²³やきかちん御^[ママ]ミてのよし=て何れも拝領也」むすひ文=て下ろう²²⁴両頭御申の」よし=て

拝領の事

暑中に

御領所のあゆ十斗り御かわらけ_二て年々拝領の事下ろう_一むすひ文也

下ろうの人への文言ハ文のうち_二ハ御²²⁵そもし_一と認候 上書ハ

誰殿

人々御返事参らせ候

²²¹

名

[注19]

- 217 御障り_二…陛下には「御きさはり_二」「御申分_二」という。「御障り_二」は臣下に対することば（大聖寺ゴゼン談）。
- 218 夜中もよく御格子成まいらせられ候…「御格子成」は陛下のご就床のことを申し上げる。（この句は古風で、今は使わないとの大聖寺ゴゼン談）。
- 219 大すけ…ダイスケは奥向きの取締りをする典侍。
- 220 長はし…長橋局は口向きの取締りをする勾当掌侍。
- 221 人々申給へ候、人々御返事参らせ候…「人々申給へ候」はどうか取り次いでくださいの意。差出人とあて名とが同等の身分のときに付ける。「人々御申入」は上向き、「人々御返事参らせ候」は同輩以下への返事のときに付ける。
- 222 御さた…陛下のご命令。
- 223 御やきかちん…菱はなびらのこと。（§ 25—2参照）。
- 224 両頭…^{だいすけ}大典侍と長橋局。
- 225 御そもし_二…二人称。「おまへ_二」「そなた_二」というより低い人に対していう。（なお音声言語ではオンモージサマというとの大聖寺ゴゼン談）。

(3) 折り紙_二手本_一 (§ 113)

折り紙（二つ折）・ちらし書（横ちらし）の書式を示すために、写真⑮を掲げる。この手本は、大聖寺ゴゼン（石野慈栄さん）が宮中お内儀の呉服係り（古屋建子女官）に書いてもらった「新年恐悦申入れ」である。

- 一 新年の「めでたき」となたも」
- 二 おなし」御事に」祝入」まいらせ候 愈」
- 三 御揃」被遊」御機嫌」よく」成らせられ候」
- 四 ²²⁶めでたき」としに」移りまいらせられ候」
- 五 御賑_二の」御沙た」めて度」忝_二り」まいらせ候」かしく」
- 六 弥」御前_二」にも」
- 七 さむさ」の」御障も」
- 八 おハしま」し候ハて」
- 九 めてたき」年を」御迎」
- 十 相か」わらす」御賑_二」しく」
- 十一 御」祝」被成候」御事と」
- 十二 めて」たく」御悦」申まいらせ候」私事」も」
- 十三 ふしに」年重」御賑_二の」

㊦ 御用共「勤まいらせ候」儘「憚々」
 ㊧ なから「御心や」すく「思しめし」
 ㊨ 下され「候」まつ〜」
 ㊩ 年始「御祝」も「申まいらせ候」印迄」に」



⑩ 折り紙・ちらし書の手本

㊦ 此品「御麗末」の「御事」乍
 ㊧ めて度「進上」申まいらせ候「なを〜」
 ㊨ 御機「嫌共」よく「幾久」しく」
 ㊩ 万々年「までも」めてたく「幾」
 ㊪ 年始の「御祝義」も「申入」まいらせ候「御事と」
 ㊫ 祝入「忝り」まいらせ候「折から」かん「気」
 ㊬ 御用心の様と存まいらせ候」
 ㊭ めて度「かしく」

松本
 鶴子の
 人々申給へ候

岩上
 亀子

[注20]

226 御揃被遊…両陛下が御揃あそばされの意。

227 忝り…忝けなく。

2. 宝鏡寺御日記明暦三年紙背文書 (§ 114)

(1) 御所々おほせのよしニて (§ 115)

このお文は、宝鏡寺御日記明暦3年正月5日の紙背文書(たてぶみ・ちらし書、結び文?)で、大御ちの人(後西天皇のおちの人)から宝鏡寺の宮(21世高徳院宮)に仕える「たつ」(注239参照)というおちの人(養育係)へあてたものである。



⑩ 御所々おほせのよしニて

まず最初に嘉定の献上物とお文のお礼を、次に陛下のご機嫌伺を述べ、相手の宝鏡寺の宮様のご機嫌を祝う。またこの日には、お袖止めの月見の宴 (§ 40—1参照)があるので、そのことにも言及している。

御所々²²⁸「おほせの」よしニて「御ふみのやう」かたしけなく「ことに」御かつう²²⁹「いたゝき」
まいらせ候「誠にめでたく」いく久しく「まん〜ねん」も「(かしく)」そくさ井²³⁰に
て「あ井かわらす」いたゝき「まいらせ候」やうに「^{【祝カ】}井」入「まいらせ候」まつ〜^{【けカ】}
し「からぬ」あつさ」にて「御さ候へ」とも「^{【うカ】}〜²³²御きけん」よく「御さ」候「まゝ」²³¹「^{【御カ】}
心やすく」^{【思カ】}「め」し候「やうニ」申入²³³「られ候」その御所々」にも「御きけんの」よし「か
す〜」めで「たく」思「まいらせ候」また「はん」には「御月みの」よし「まことに」さ
やうに「御さ」候「はんと」そんし「めで」たく「月も」さへて「御きけんよく」御らん」な
され候「やうに」と「いわ井入」まいらせ候「こゝ御程」けふは「何かと」いもしさ²³⁶「え」ま
いり候「ましく候」御残多思し候「御まへ」よきやうに「御申入」たのみ「まいらせ候」
めでたく「かしく」まつ〜」てわ殿も¹⁹⁶「つたへまいらせ候て」かた「しけ」なさ「おな」
し」とをり「申とて候」めでたく「かしく

たつ
392 御ちの人
【まいる 申給へカ】

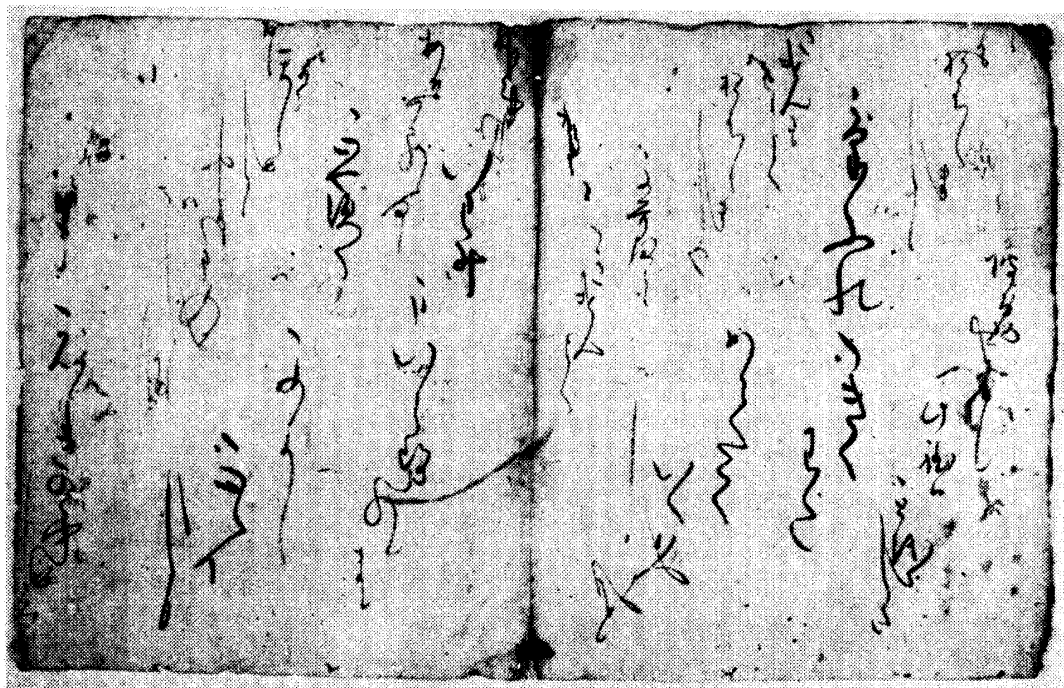
大御ち
238

[注21]

- 228 御所²…ここでは宝鏡寺の宮（明暦・万治の当世の宮は21世高德院宮様，注43）のこと。御所²は天皇・上皇・法皇をはじめ，この場合のように宮門跡にもいう。（宝鏡寺は「百々御所」と御所号が許されたから御所²という。）なお摂家・清華のあるじにも用いることがある。住居とその主人の呼び名は重なることが多い。
- 229 御かつう…御嘉定。ここでは，嘉定の日に食べる七色のむし菓子のこと。かつうは御所方の年中行事の一つで，毎年6月16日に行われる。（§ 39参照）。この日には七色のむし菓子を各門跡から宮中に献上した。（当時の風習として，子から親に贈ることが多かった。）このお文はそのお礼について述べたもの。（「お湯殿の上の日記」延宝5年6月16日その他参照）。
- 230 かしく…文脈と関係のない「かしく」の例（§ 111参照）。
- 231 けしからぬあつき…大へんな暑さというほどの意。
- 232 □へ^{うッ}…後西天皇のことか。（注44参照）。
- 233 申入れ候…大御ちの人が宝鏡寺の宮様に申入れる。
- 234 その御所²…相手の主人，すなわち宝鏡寺の宮様。（この御所²といえは，自らの主人ということになる）。（§ 116・お文2参照，§ 25—2参照）。
- 235 つき見…ここでは，かつう（嘉定）の日の月見のこと。（§ 40—1参照）。
- 236 いもしさ…「いもしさ」は「忙しき」の御所ことば（もじ言葉+名詞をつくる接尾語「さ」）。
- 237 御まへよきやうに…宮さんのおん前をよいように。
- 238 大御ち…陛下（ここでは後西天皇）のおちの人。天皇のおちの人は「大御ち（の人）」という。
- 239 たつ御ちの人…「たつ」または「たづ」という名の宝鏡寺の宮の御ちの人。宮様に直接あててることをさけて，その御ちの人にあててある。（§ 111参照）。

(2) けふの御きくわためてたく（§ 116）

このお文は正月18日の紙背文書（たてぶみ・ちらし書き，結び文？）で，宮中での菊綿のお祝いを宝鏡寺へもお分けになったことについて，「かつしき（喝食）の御中」へあてたものである。



⑪ けふの御きくわためてたく

このお文には差出人の記載はない。

けふの御きく」わた」めてたく」いく久」しく」もと」いわ井」まいらせ」られ候」まゝ」こ
 のよし」御心えて(かしく)」披露」申とて候」此程ハ」御とを〜」しき」□て」おはし」
 ま」し候」□き」けんも」よく」おはしま」し候や」この御所=も」御き」けん」よく」
 神事」も」あそ」はされ候まゝ」御心やすく」おほし」め」し候」やう」たのみ」まいらせ
 候」めてたく」かしこ

ㄨ

かつしきの御中
 243 まいる
 申給へ

[注22]

240 けふの御きくわた…きょう(旧9月9日)の菊綿。菊綿は重陽の節句に行う。前日に菊に綿をきせ、翌朝に取って、露のしめったもので顔を拭い、延命の祝い事とした。当時山科家から菊の被綿を献上した。

241 申とて候…申せとて候。だれだれの仰せで申し上げますの意。(§ 100—㊸字形参照)。

242 神事もあそはされ…日々の神事もあそばされの意。

243 かつしきの御中…御側の人御中の意。かつしきは喝食。上臈がない時、直接宮様にあて名するのをさけ、「かつしきの御中」と書くことがある(大聖寺ゴゼン談)。

(3) 文のやう日ろう申まいらせ候 (§ 117)

このお文は正月25日の紙背文書(たてぶみ・ちらし書き)で、「こりこり」(注245参照)進上について、「あせち」から宝鏡寺上臈にあてたものである。

文のやう日ろう申まいらせ候 まことにけしからぬあつさ=ておはしまし候 となたにも御き
 けんの御事=て(かしく)めてたくおなし御事に覚しめし候 ほうきやう寺にも□きけんよく
 めてたさ此こり〜一折まいらせられ候 めてたくいく久しくもと□わ井思召候よしよく〜
 心えて申とて候 わたくしへも覚しめしよらせられ候一折はいりやう候 かたしけなさいたゝ
 き入まいらせ候 よく御心にて御申入たのみいりまいらせ候 めてたくかしく

ㄨ

上らふの御中
 248 御日ろう

あせち
 247

[注23]

244 文のやう日ろう申まいらせ候…宝鏡寺様からこちらへいただいたお文をひろう申し上げましたの意。

245 こり〜…漬物用の干瓜のことか(擬声語)。(「大聖寺の宮よりこり〜まいる」と「御湯殿の上の日記」の貞享2年6月18日に、「あをうりのこり〜もちてまいる」と「宝鏡寺日記」慶安2年1月9日にある。)

246 わたくしへも覚しめしよらせられ候…わたくしへも思召しいただきましたの意。宝鏡寺からのお文で、「あせち」にも一折とあったのであろう。

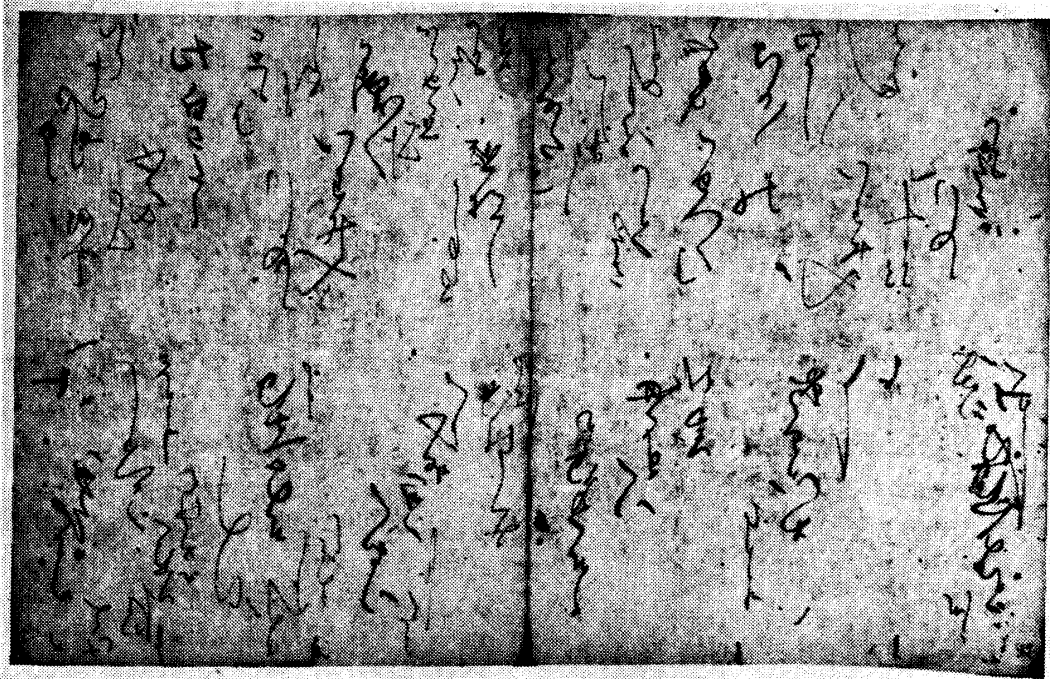
247 あせち…女官の官名。宝鏡寺日記万治3年正月19日の「あせち」や大聖寺日記万治3年1月8日の「あせちとの」と同じ人であらう。(195参照)。

248 上らふの御中 御日ろう…宝鏡寺の宮様に仕える上臈にあてて、宮様へよろしくごひろうを頼んだもの。

(4) ちか〜の御せつく=て (§ 118)

このお文は2月1日の紙背文書(折り紙・ちらし書き)である。御所から宝鏡寺の宮へお節句の祝いもの(白砂糖とぶくのかんぴょう)を持参の際、みくしげ様(注39参照)に仕える「い

なの」から、宝鏡寺「たつ」おちの人へあてたものである。なおこの文の末尾に、この文を宝慈院（注250、宝鏡寺の兼務かと思われる）に届けるようにとある。



⑩ ちかゝの御せつく＝て

ちかゝの「御せつく」＝て「めて」たさ」となたも」をなし」御事と」かすゝ」いわ井入」まいらせられ候」此白さたう」ふくの」かん」ひやう」めて」たき」御しるし」まて＝」まいらせられ候」その御所²⁴⁹」にも」いよゝ」御き」けん」よく」みくしげ³⁹」にも」御そく才²⁴⁹にて」いく」千とせ」万代」まても」あいかわら」す（かしく）」めて」たさ」まいらせられ候」やうに」と」いわ井入」覚し」め」し候」此よし」^{〔御〕}心えて 申との 御事＝てお」はし」ま」し候」^{〔あッ〕}すハ」めて」たく」ならせられ候」ハん」まゝ」^{〔そッ〕}もし²⁴⁹」にも御とも」＝て」^{〔切断〕}いり」まち」まいらせ候」返々」此文²⁵⁰」ほう」し」いん²⁴⁹へ」御とゝけにて」下され候」まいらせ候」たのミ」申候」めてたく」かしく

たつ
御ちの人²⁴⁹
まいる
申給へ

いなの
251

〔注24〕

249 ^{〔そッ〕}もし²⁴⁹にも御とも＝て…あなた様にも宮様のお供をなさって。

250 ほうしいん…宝慈院は景愛尼寺の別院格。後光厳院の皇女秀仁尼公が住持されてから、足利義教の室、日野重子の連枝が入室した。その後、日野氏から歴住が出身し、千代野御所という。江戸初期、景愛寺が廃寺になってからは、大聖寺・宝鏡寺が景愛長老を号し、宝慈院をも兼務した。（この関係で§134に示すような宝慈院あての、みくしげ様からのお文が宝鏡寺に残っているのであろう。）現在は京都市上京区新町通にあり、臨済宗。

251 いなの…みくしげ様に仕えた女官。

(5) よくそ御人まいらせられ候 (§ 119)

このお文は2月24日の紙背文書(たてぶみ)で、みくしげ様に仕える「いな」から、宝鏡寺「たつ」おちの人へあてた返事である。みくしげ様から宝鏡寺の宮様へ遣わされた「ムモジ」と黒の^{しゆちん}襦珍につけたお文で、宝鏡寺から献上のご馳走のお礼にも及んでいる。

よくそ御人²⁶²まいらせられ候 けしからぬあつさにて候へとも御所²⁵²にも御きけんよく御さ候よ
しめてたく²⁵³覚しめし候 御つほね³⁹にも御心よく御さ候まゝ御心やすく思しめし候やうと申上
まいらせ候 此中²⁵⁴ハまいり候てやふ〜となくさみかたしけなくそんし候 又ならつけのおけ
の事けふハ御いそかわしく候まゝこなた²⁵⁵てミまいらせ候へは御さ候ハ、かし申へく候 此²⁵³
もしこれ²⁵⁴ハこそ²⁵⁴の²⁵⁴てうへ²⁵⁴にもあかりの²⁵⁵て御さ候まゝ御せん²⁵⁵御あけなされ候²⁵⁶へく候 ま
た此くろしゆちんのきれハ二つ²⁵⁴御たち候てほそくあそハし御おひ²⁵⁵御くけさせてあそはさせ
られ候へく候 (めてたくかしく) 返〜三木殿はしめミナ〜御事つけ申まいらせ候 いろ
ろ〜御ちそういまにはしめすかすかたしけなくそんし候よしよく〜申たつしなされ候

たつ
御ちの人²⁵²
まいる
御返事

いなの

[注25]

- 252 御人…宝鏡寺の宮様からのお使いの人
- 253 むもし…麦の御所ことば、大晦日と節分には麦のオパン(御飯)を食べる。
- 254 こそ…こぞ(去年)。
- 255 御せん…ご飯(宮中では陛下のを、ここでは宝鏡寺の宮様のをいう。)
- 256 候へく候…§ 100 字形表⑩参照。

(6) 御所²⁵²より仰のよし²⁵⁷て (§ 120)

このお文は3月4日の紙背文書(たてぶみ)で、御所の三人の名で宝鏡寺「たつ」おちの人へあてたご返事である。宝鏡寺の宮様から御所の三人へ「かちん」(餅)と「はくてう」とを頂いた礼を述べてある。

御所²⁵²より仰のよし²⁵⁷て御ねん比の文のやうかたしけなくそんし候 仰のことく此中ハ世もひ
えまいらせ候へ共 御所²⁵²御きけんよくならせられ候よし²⁵⁷もしなからめてたくそんしま
いらせ候 御つほね³⁹にも此ほとハ打つゝき御心よく御さ候まゝ御心やすく覚しめし候やうによ
く〜御申上まいらせ候 まつ〜申入候はんを三人²⁵⁸かたへとおほせられ此御かちん²⁵⁹はくて
う下され候 かす〜かたしけなくそんし候 (かしく) こなたよりこそ御くわんたいなから
なになとそんしまいらせ候所に²⁶⁰覚し召しつけにて下され候 □事²⁶¹ミやうかつ〜かたしけな
くそんしまいらせ候 □²⁶²り〜しやうくわん申いたゝき申候へく候 よく〜御心えて申上の
御事たのミそんし候 こゝ²⁶³もしすこしの御すきも御さ候はゝふとまいり候て万御礼とも申上
まいらせ候 昨日の御かこ返しまいらせ候 めてたくかしく

御返事
たつ御ちの人まいる
申給へ

[注26]

- 257 くもしながら…恐れながら。
- 258 三人みたり…三人は御匣様に仕える差出人の三人（「あさた」「いな」などの三人）。
- 259 おほせられ…宝鏡寺の宮様が仰せられ。
- 260 御かちん…お餅の御所ことば。
- 261 はくてう…白鳥は白鳥徳利入りの酒か。
- 262 御くわんたいながら…御緩怠ながらは憚りながらの意（遅くなりましたが）。
- 263 こゝもし…第一人称の御所ことば（もじことば）。
- 264 御すき…おひま。

(7) 昨日はならせられ (§ 121)

このお文は3月17日の紙背文書（たてぶみ）で、御匣様に仕える「あさた」「いな」連名で、宝鏡寺「たつ」おちの人にあてた栗（嵯峨みやげ）進上のお文である。（書き手は「あさた・いな」のうち、「いな」らしい。）

昨日ハならせられ御きけんよくめてたくそんし候 さりなからふた265〜とくわん御成まいらせられ候 御残多そんし候 此くりたえ266〜しく御さ候へともさか267へまいり候しるしまてに上まいらせたく候ま269くるしからす候ハ、御あけ候て被下候へく候 そもし268にもふた〜と御帰り御残多思ひまいらせ候 こなたにも御つほね159いよ〜御そくさい268に御さ候ま、御心やすく覚しめし候へく候 けいこう院159いまたそこほと＝御さ候や 昨日ハ御事つてかたしけなく御さ候 久しく御めにかゝり候へて御ゆかしく御さ候 御そくさいに御座候よしうけ候てめてたくそんし候よし申たく御座候 かしく

又申候 やわたの御ふた御かう水進し申候 御日ろう候へく候

かへす〜昨日ハミちもわろくそもし268御くたひれの御事と思日まいらせ候 めてたくかしく

たつ
御ちの人まいる
人々御中

あさた
いな

[注27]

- 265 ふた〜と…忙しいで。
- 266 たえ〜しく…少しで。
- 267 さか…嵯峨（京都市右京区）。
- 268 上まいらせられ候たく候…上げまいらせられたく候の意。
- 269 くるしからす候ハ、…お差支ございませんでしたら。

(8) ミくしけ²⁷⁰よりたゝいま申との (§ 122)

このお文は4月11日の紙背文書(たてぶみ)で、御匣様に仕える「あさた」から宝鏡寺の「たつ」おちの人にあてたものである。色のよい「もみ」(紅絹)があれば、見せてほしいとある。



⑩ ミくしけ²⁷⁰よりたゝいま申との

ミくしけ³⁹よりたゝいま「申との」御事」=て候 をりふし=て候」 その御所²⁷⁰」いまゝて
めし候 御ふくの」御うらとれ=ても色よく御入候ハ」御さ候」ハす候や」 わろきハ御いや
て」御さ候」 とれにてもうつくしく」よきもミノ御うら御さ候ハ、」御ふく=つき候て御入
候ともこなた²⁷²へ御め²⁷³にかけまいらせられ候へく候」 ちと御らん」したき事御さ候」 此よし
申とて候」 かしく

返々よき御うら御入候ハ、」御め²⁷³にかけまいらせられ候へく候

たつ
御ちの人²⁷¹
まいる
申給へ

あさた

[注28]

270 御ふく…着物。

271 色よく御入候ハ御さ候ハす候や…色のよいものがおありにならないでございましょうか。(「御入候」の字形は写真⑩と§ 100字形表⑩参照)。

272 こなた…御匣様方。

273 御め²⁷³にかけまいらせられ候へく候…御目にお掛け申上げて下さい。(「まいらせられ候へく候」の字形は写真⑩と§ 100字形表写真⑩参照)。

(9) 文くハしく思日まいらせ候 (§ 123)

このお文は5月6日の紙背文書(たて文)で、御所の「いな」から宝鏡寺の「たつ」おちの人へあてた返事である。はなむけの相談は近日中にすること、薬は「りうけい」に依頼してあるが、さらにあなたからも催促してほしいといっている。

文くハしく思日まいらせ候 御所²⁷⁴御きけんよくおハしまし候よしかす〜めてたくそんし候
われ〜もちと御みまひにまいりたく御さ候へ共何かと御いそかハしさゆへえまいり候²⁷⁴へてめ
いわく申まいらせ候 又御はなむけの事ハいつれも二三日中²⁷⁵まいり候ハんまゝそのおりふし
御たんかう申候へく候 此文¹⁶¹りうけいと²⁷⁵のへ御くすりの事申やりまいらせ候まゝいそき御とゝ
けて下され候へく候 そもし²⁷⁵よりもよく〜御申やり候てまいらせられ候へく候 昨日ハ御
出候へともふた〜といたし御ちさうも申候へて御残多覚まいらせ候 いつれも御めにかゝり
申まいらせ候 めてたくかしく

御返事

たつ

御ちの人²⁷⁴

まいる
申給へ

いな

[注29]

274 めいわく申まいらせ候…困り申し上げています。

275 りうけい…医者か。

(10) ほうきやう寺²⁷⁴よりと (§ 124)

このお文は5月9日の紙背文書(たてぶみ)で、御所の「いな」から宝鏡寺の「たつ」おちの人へあてた返事である。宝鏡寺からお文と矢田まいり(注194参照)の「おかちん」を頂いたお礼文である。

ほうきやう寺²⁷⁴よりとおハしまして文のやう申入まいらせ候へハいつものことくやたま¹⁹⁴まいり候
とて此御かちんまいらせられ候 めてたくいく久しくまん〜年までもまいらせられ候やうに
といわ井覚しめし候 まつ〜御所²⁷⁴御きけんよく候てめてたく御うれしく覚し召し候 こな
たにも御心よく申とて候 御心やすく覚しめし候やうにと申入まいらせ候 返〜くれまいら
せ候によくそ〜御人まいらせられ候 御まんそく²⁷⁶覚しめし候よしよく〜申とて候 めて
かしく

たつ

御ちの人²⁷⁴

御返事

いな

[注30]

276 めてかしく…めてたくかしくの略。

(11) 此中文= てなりとも (§ 125)

このお文は5月13日の紙背文書(折り紙, ちらし書き)で, 自分の病気は快方に向っているから, 宝鏡寺の宮様はじめ皆々さんによろしくと, 御所の「いせ」から, 宝鏡寺の「たつ」御ちの人にあてたものである。

此中文= てなりともそもし²⁷⁷度まで申たく候へともてまへもとりまきれ候て御ふさた申候²⁷⁸ こと
の外かんしまいらせ候 御所²⁷⁹⁻¹度御きけんよくおはしまし候やうけ給たくそんしまいらせ候 わ
たくしわつらひも御ねんき= (かしく) 仰られ候 かたしけなくそんし候 此四五日ハよく御
さ候てしよくなともたへ申候まゝ此分に御さ候ハ、やかてよくなり候ハんとうれしくそんしま
いらせ候 御つゐても御さ候ハ、御まへよきやうにたのミ入まいらせ候 此一折あけまいらせ
候 たく^{【切断】}日ろう候て^{【切断】}とて御さん^{【御々】}度^{【御々】}そくさい候や^{【御々】}〔^{【切断】}〕く^{【御々】}所^{【御々】}度^{【御々】}きけんよくおはしまし
候や^{【おカ】}〔^{【おカ】}〕まへよきやうに^{【たカ】}のみ入まいらせ候 めてたくかしく

たつ御ちへ
279-2 まいる
申給へ

いせ

[注31]

277 此中…コノジュウ。このほどの意。

278 ことの外かんしまいらせ候…とりまぎれ御ふさたとのおことばに対しての恐縮のことば。

279-1 御ねんき…御ねんごろに。

279-2 たつ御ちへ…「たつ御ちへ」とあて名人をよびすてにするのは, あて名人の身分が差出人より低いときにする古格な書き方と思われる。

(12) 一ふて申入まいらせ候 (§ 126)

このお文は, 5月16日の紙背文書(たてぶみ)で, みくしげ様下降のおしるしに遣された「ほろむし」に添えた, みくしげ様に仕える「ちよ」から宝鏡寺の「たつ」御ちの人にあてたものである。返し書きには, みくしげ様のお留守中にお伺いしたいが, 畳がえのために忙しくて参れないとある。

一ふて申入まいらせ候 きのふわてんきよく御くしげ²⁸⁰度御きけんにて御げこうなされめてたく
そんしまいらせ候 御所²⁸¹度へいわ井候て此ほろむししんせられ候まゝ御ひろうたのミ申候 御
るす= も御ミまい下されさいしよう²⁸¹度へ申候 かたしけなかりなされ候 いつれもやかて〜
御さ候ておらせられ候 (めてたくかしく)

返々御所²⁸⁰度= ても御きけんよく御せんもあかり申候や わたくしも御こ²⁸⁰度かたへも御とも
申御るす= もあかりたく候へとも廿六日からたゝミかへ元日までかへ申候ゆへ御ふさた申
いつも〜うそつきまいらせ候 御所²⁸¹度へよく御申あけたのミそんし候 又きのふわあや²⁸¹
つり= 御所へならせられ候や ころもとなく思ひまいらせ候 めてたくかしく

たつ御ちの人宛
まいる

ちよ

[注32]

280 御こ宛…みくしげ様を御生母とする後水尾上皇の御子様と思われる。

281 あやつり…操り芝居。三味線を伴奏に浄瑠璃に合せて手造りの人形をあやつる演劇。おなぐさみに供したのである。

(13) 仙洞宛より申入候 (§ 127)

このお文は6月6日の紙背文書(折り紙, ちらし書き)で, みくしげ宛から「たつ」御ちの人にあてた, 紀伊国のおみやげのおすそわけに添えた文である。

仙洞宛より申入候 御心はいかゝおはしまし候や御きゝまほしく覚しめし候 こなたにも御き
けんよくならせられ候まゝ御心やすく覚しめし候やうに御申上まいらせ候 此ミやさき一折ニ
きいの国よりめい物に候とて参^[りか]候^[まゝか]もしやとまいらせ候 かしく
此よしよく心えて申とて候 御心えて日ろう候へく候 めてたくかしく

たつ
御ちの人へ

ちよ
みくしげ
39

[注33]

282 御きゝまほしく…御きかまほしくの意。

283 こなた…仙洞様 (後水尾上皇)。

(14) 御つほね宛より申とて候 (§ 128)

このお文は6月11日の紙背文書(たてぶみ)で, みくしげ様に仕える「あさた」から宝鏡寺の「たつ」御ちの人へあてたもので, みくしげ様の仰せで, 宝鏡寺の宮へ本阿弥に守り脇差を持参させることなどが記してある。

御つほね宛より申とて候 御所宛御きけんよくおはしまし候や こなたにも御きけんともよく
おはしまし候まゝ御心やすく覚しめし候やうに申上まいらせ候 さやうに候へハあすほんなみ
まいり候まゝ御まもりわきさし御もたせ候てまいらせられ候へく候 こよひはくれ候まゝあす
そこほとよりまいらせられ候へく候 又此御はこハほうきやう寺宛御寺ニつきし御長はこに候
まゝ御くらへ御入候ておかせられ候へく候 かしく

このよし申との御事ニて御さ候 めてたくかしく

たつ
御ちの人宛
まいる
申給へ

ちよ
あさた

[注34]

284 ほんなみ…本阿弥。刀剣鑑定家。

(15) 御所²⁸⁵よりとおはしまして (§ 129)

このお文は、6月14日の紙背文書(たてぶみ・ちらし書き)で、宮様お成りの際の留守をわびるとともに、幡枝の円通寺お成りの時にご一緒されるのなら、お供の人数を知らせてほしいと、御所の「いな²⁸⁶」から、宝鏡寺の「たつ」おちの人にあてたお文である。宝鏡寺からさきに来たお文の返事。

御所²⁸⁵よりとおはしまして文のやう申上まいらせ候へハまことにきのふハならせられ御きけんよく候てめてたく御まんそくと覚しめし候 さりなから御留守ゆへなにの御ちそうもあそハし候へて数々御残多覚しめし候よしよく〜申され候 いよ〜上³⁶さま³⁹みくしげ²⁸⁷御きけんよく候まゝ御心やすく覚しめされ候やうに御申上まいらせ候 わたくしともへも御事つてかたしけなくそんし候 いつれもこなた御すき=成候ハ、(かしく) ふと〜まいり申上候ハんよし御申上候て被下まいらせ候 そもし^御にも□そくさいにて候へく候 □^御さ候文はこたしかにうけ取申候 (□^めてたくかしく) 返々まつ〜仰られ候ハんとあすあけの宮¹⁰⁴としの宮²⁸⁵はたえたへならせられ候ま、□^その御所²⁸⁵御きけんもよく候ハ、ならせられまいらせ候 □^ならせられ候ハ、御ともの人かす御かきたて候て□^たいま御申こし候へく候 □^このよしよく〜申とて候 (めてたくかしく) □^切ならせられ候ハ、そなたよりすく=なしまいらせられ候へく候 □^ならせられ候て御ともの人かす御申こし候へく候

たつ
御ちの人²⁸⁶
[]

い
いな²⁸⁶
の

[注35]

285 としの宮…^{としのみや}聡宮は後水尾天皇の皇子道寛法親王で、聖護院の宮。生母は蓬春門院で、宝鏡寺の仙寿院宮(理昌女王)や元瑤内親王(朱宮)の弟宮。(§ 97参照)。

[付1] 慶安四年宝鏡寺御日記紙背文書 (§ 130)

(16) さしたる御事にて候かねとも (§ 131)

このお文は8月5日の紙背文書(折り紙・ちらし書き)で、みくしげ²⁸⁷から宝鏡寺の盛侍者にあてられたもので、宝鏡寺の宮様(20世仙寿院宮)にご見物にお成りになることを勧めている。

さしたる御事にて候かねとも御けん物事おはしましちらとならせられ候て御らんせられ候まし²⁸⁸く候や ちん²⁸⁶しやう寺²⁸⁶ももならせられ候て御らんし候まゝ []^切られ候まし²⁸⁸く候や ならせられ候てたゝ今御なりまち入申候へく候

此よし申上まいらせ候 めてたくかしく

せい²⁸⁸ちしや²⁸⁸

みく²⁸⁷しげ²⁸⁷

[注36]

286 ゑんしやう寺²⁸⁶…円照寺門跡（奈良県添上郡帯解村）の開山の文智女王。後水尾天皇の皇女梅宮、深如海院宮。生母は大納言典侍（与津子）（§ 97, 文17・§ 132参照）。

287 みくしけ…宝鏡寺の宮のご生母蓬春門院（§ 97, 注39参照）。

288 せいちしや…盛侍者。宝鏡寺の宮に近侍する上藤尼。

(17) 文のやうかたしけなく（§ 132）

このお文は9月6日の紙背文書（折り紙・ちらし書き）で、円照寺の文智女王から、宝鏡寺の宮へのご返事で、宝鏡寺の宮様のご病気を見舞っておられる。なお返し書きは上部が切断され虫などで不明箇所が多い。

文のやうかたしけなくそんし候 まつ〜その御所²⁸⁹も御たんさし出候て御めいわくあそハし候よし御心もとなくそんし候 わたくしみのほとにてそんしやりまいらせ候 ことのほかひえまいらせ候まゝ御ゆたんなく御やうしやうあそハし候へく候 かしく

我〜もいまたすき〜とは御さ候ハね共まつよき分にて^[切断]仰は^[切断]□〜へ^[切断]候まゝ^[切断]]
 かいに命御さ候ハ、^[おカ]□^[ムシ]めにかゝり^[色々カ]]〜^[ムシ]]とも申^[ムシ]□つくし候^[ムシ]]^[ムシ]]^[ムシ]]
 も三河御はりあそハし候由^[御カ]□たんの御事にておハしまし候^[さカ]]^[西カ]]ては□湖集はや〜と御返しなされ候 又々何にてても御用に候ハ、仰下され候へく候 筆にて御返事申たく候へ共きやう水いたしふてをやといいかゝ候しや かしく

廿二日

文 智
286

ほうきやう寺²⁸⁶
御返事

[注37]

289 御たんさし出て…痰がお出になって。

(18) 高松²⁹⁰より申とて候（§ 133）

このお文は9月17日の紙背文書（折り紙・ちらし書き）で、御所の「かつ」御ちの人から宝鏡寺の「あちや」御ちの人へあてたもので、おはぐろ始めの御祝いの品物を届ける時のお文である。

高松²⁹⁰より申とて候 けふは此御所²⁹¹めてたく御はくろあそハし候御事にておハしまし候 てんきもよく上²⁹²にも御幸の御事= てめてたさ御ひし〜の御事おほしめし候やうまいらせられ候 此御かちん一ふた御てうしひさけ¹⁷⁵（かしく） めてたくけふの御いわ井まいらせ候まゝましくいられ候 めてたくいわ井まいらせられ候て御まんそく= おほしめし候へく候^[めカ]]
 たくかしく

あちや
御ちの人²⁸⁶
[]

か
かつ
御ち

[注38]

- 290 高松²⁹⁰…高松宮好仁親王の息女明子女王のことか。のちに後西天皇の女御となられた。なお宝鏡寺日記慶安2年1月3日の条に「高松²⁹⁰へ御ふるまいにてならしませられ」とある。 (§ 97-2系図参照)。
- 291 御はくろあそはし候…お鉄漿^{かお}始めをあそばしましたの意。御はくろは歯を黒く染めること。当時、上流社会では、成人のしるしとして御はくろをつけた。
- 292 御ひし²⁹²の御事…「めでたき御ひし²⁹²の御事」とは大変めでたい御事の意。「お湯殿の上の日記」の貞享元年七月11日の条に、「いつものことくうたいなと有て御ひし²⁹²也」とある。

(19) 此程ハ御遠²⁹³しく覚しめし候 (§ 134)

このお文は12月12日の紙背文書(折り紙)で、みくしげ様から「宝慈院」にあてた宝鏡寺の宮様のご病氣を見舞ったものである。

此程ハ御遠²⁹³しく覚しめし候 ほうきやう²⁹³御心いまたすきともおはしまし候ハぬよし御心
もとなくおほしめし候 此御重の内^{神と}白に^ときゆめつらしからぬものなからもしやとまいらせられ候
〔^{破レ}〕しよく心えて申とせ候 かしく

御心えて日ろうまいらせられ候 めてたくかしく

ほうしあん²⁵⁰〔 〕

みくしげ

[注39]

- 239 すきと…すつきりと。

[付2] 万治三年宝鏡寺御日記紙背文書 (§ 135)

(20) 御ねんころゝこま²⁹⁴との文 (§ 136)

このお文は万治3年3月13日の紙背文書(折り紙)で、他門跡に仕えている人から宝鏡寺にあてたあいさつで、お祭の招待と「ゑりん」の親の重病の時に、ゑりんが暇を頂いたことのお礼ものべてある。このお文には差出人もあて名の記載もない (§ 111参照)。

御ねんころゝこま²⁹⁴との文下され御め²⁹⁵かゝり申候やう²⁹⁶ななめ²⁹⁷入まいらせ候 久しく
御けさん²⁹⁴入候ハて御なつかしくそんしまいらせ候 まつ²⁹⁵その御所²⁹⁶御きけんよく御さ候て
かす²⁹⁵めてたくそんしまいらせ候 こゝもと御もんせき²⁹⁵も一たん御きけんよく御さ候ま
ゝ御心やすく候へく候 ちと²⁹⁵御ミまい申あけたく候へとも何かといたし〔^{切斷}〕〔^{下され}〕
〕〕 此月廿一日²⁹⁷こゝもとまつりにて御さ候まゝそもし²⁹⁶はゝ御つれたち候てちと²⁹⁶
御なくさミ²⁹⁷御いてなされたく〔^{そんしか}〕あけ申候 かならず²⁹⁶よミやより御いてまち入
まいらせ候 おきちかたへすくふみ下され何より²⁹⁶てうの物²⁹⁶てかたしけなくそんしまいら
せ候 めうせいこうしゆんと²⁹⁷のへ御事つてのよし申候へハよく²⁹⁶心へて申せとて候 いつも
御ねんころゝこま²⁹⁷おほせられ候 かたしけなく候てかしくかしくめてたくかしく

御たよりとてちと〜御人²⁹⁸あん迄しこう御さ候おりふしよくそや〜文かたしけなくそん
 しまいらせ候 ゑり²⁹⁹んおやさん〜= わつらいのおりふしゑりんへ御ひま下され候てかた
 しけなくそんしまいらせ候よしよく〜御れい申候てくれ候やう= 申され候 何も〜御
 めにかゝり申入まいらせ候 かしく

[注40]

- 294 御けさん= 入候へて…長い間お目にかかりませんので。けさんは見参の意。
 295 こゝもと御もんせき²⁹⁶…差出人の仕えている門跡様。
 296 てうの物…重宝の物。
 297 めうせいこうしゆん…宝鏡寺の宮様に仕える同輩の尼僧名か。
 298 御人あん迄しこう御さ候…使いのお人が庵まで伺候なされた。
 299 ゑりん…宝鏡寺の御日記によく出る人名。

(21) [前欠]] しくもと御所よりとおはしまして (§ 137)

このお文は3月27日の紙背文書(たてぶみ)で、宝鏡寺の宮様に香需散という薬を進上する
 とともに病気のお見舞を述べている。このお文には差出人もあて名も記載してない。

[前欠]] しくもと御所²⁹⁸よりとおはしまして文のやう御まんそくに思召候 帰山^{ママ}とてことの
 ほかのあつさ= ておはしまし候 その御所²⁹⁸いまた御せんもあかりまいらせられ候へて御ふら
 〜とあそはし候よしあつさゆへとおほしめし候 よく〜御やうしやうあそはし候やうにと
 申され候 その御所²⁹⁸御すゝしく御さ候まゝならせられやう= との事御まんそくにおほしめし
 候 やかての内= ならせられ候て仰られ候へく候 かしく

[前欠]] よしよく心えて申との事= 御さ候 そもし²⁹⁸もひとひは御まいり候へと
 も何の御ちそうも申候へて御のこりおほく御さ候 御ところかわりの候へは御あつ〜し
 きもの= て御さ候まゝそこなたへ御とももの事まち入まいらせ候 又こうしゆ³⁰⁰さんはいれ
 う院よりあけ³⁰⁰まいらせたき³⁰⁰□し申候てまいり候まゝ進上申候 □³⁰⁰かいんわたくしもたつし
 や= 御さ候 返〜いつも〜ほしうりまいらせられ候 めてたくひさしくまん〜ねん
 もといわ井入まいらせ候 かしく

[注41]

- 300 こうしゆさん…香需散(薬の名)。宝鏡寺日記には、この薬の包紙をその料紙としたものもある。

(21) ほうきやう寺²⁹⁸より仰こと御さ候て (§ 138)

このお文は3月29日の紙背文書(たてぶみ、散らし書き)で、御所の「さい」から宝鏡寺の
 「たつ」おちの人にあてた返事で、頂戴物の礼などをのべている。御所様方の御機嫌伺²⁹⁸が
 なく、すぐに用件にはいっており、最後のあて名にも披露依頼がない故、私信的性格が強い
 お文のようである。

ほうきやう寺²⁹⁸より仰こと御さ候て文のやうかたしけなさひとひはまいり候て御め²⁹⁸ミへいたし
 ことに色〜御ねん比の仰とも= ていたゝき入まいらせ候 [一行欠]] とめさせられ候
 一しほかたしけなくそんしまいらせ候 まつ〜御しうきと仰候て何よりてうほうの杉はら十

てういたゝきまいらせ候てかす〜めてたさいく久しくもとよろしく御とりなしたのみ入まい
 らせ候(かしく)あかしとのへも文のやう申つたへまいらせ候へ八年比³⁰¹かたしけなさおなし
 事=候由=て御さ候 ことにうつくしきおもしろいたゝきまいらせ候てかす〜かたしけなさよ
 く〜心えて申上候との事=て御さ候 そもし³⁰²夜よりも御しうきと御さ候てわたくしへさかつ
 きのたいあかしとのへくわし二ふくろ下され候 めてたくいく久しくもといわ井入まいらせ候
 あかし³⁰³夜もよく〜申せとて候

返〜そもし³⁰³夜御ねふ^[りか]いよ〜よく御さ候やとそんし候 くれ〜ひとひは色〜御ね
 ん比の事ともかたしけなさことしハ花の時分=あかしとのとかならずまいり候て申上候
 かしく

たつ
御ちの人夜

さ い

[注42]

301 あかしとの…「さい」と同じく御所方の人。

302 さかつきたい…盃台。

303 御ねふ^[りか]□…お眠り。

[付3] 大聖寺倫宮のお文 (§ 139)

(2) 倫宮の心おぼえ (§ 140)

このお文は大聖寺24世倫宮^{つねの}様が妹宮の宝鏡寺欽宮^{はやの}様の深曾木(文政13年3月26日に行われた)の
 ことを、同26日に心おぼえとして、絵奉書に書き留められたものである。なお御年わずか
 9歳10月の幼少の宮の筆蹟として、次の口上書とともに、その教養の高さを物語る好資料で
 ある。

廿六日
304

欽宮御方御ふか³⁰⁵」そきに^{御年□に}て御祝あらせられ候」御ひん親³⁰⁷ハ一条しゆう³⁰⁸夜にてふちハ新大納言
 殿権中納言殿御ひんうけるやくハ源しき部こはん³⁰⁸」やかいて³⁰⁹でやるやくハ」伊賀紀伊まつこれ」
 たけにて候事ある事なり

心おほへ

倫
310

[注43]

304 廿六日…文政13年3月26日。

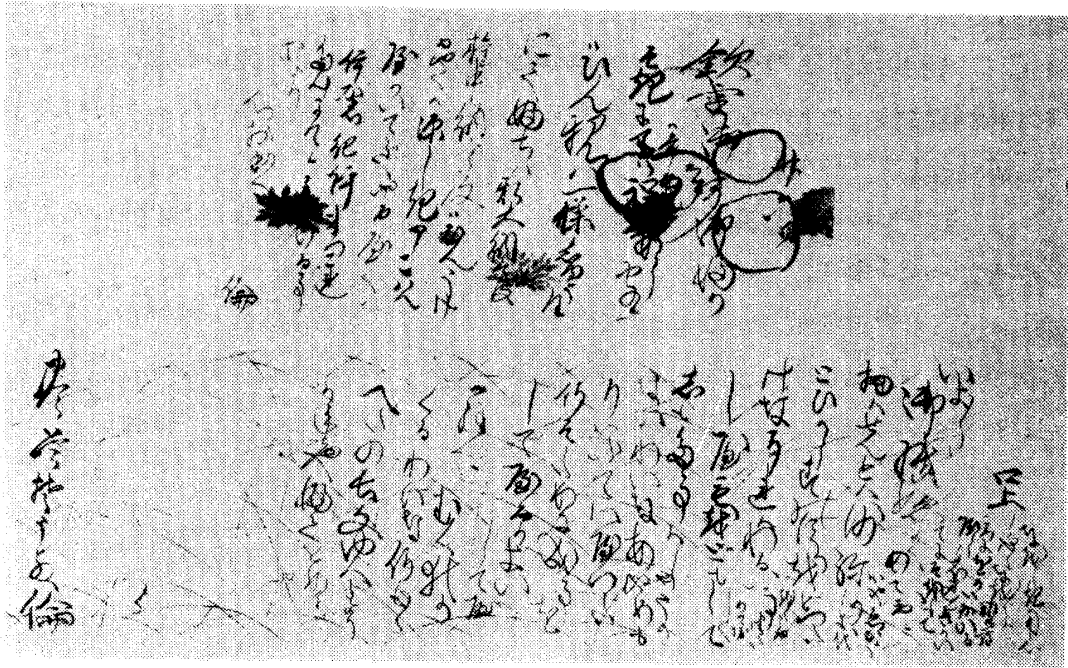
305 欽宮…光格天皇の皇女、生母は富小路家小侍従の局明子。文政7年5月11日誕生。宝鏡寺24世^{さんまじ}三摩地
 院宮靈峯理欽尼公。(筆者倫宮のお妹に当る)。

306 ふかそぎ…3才から5才までの間に、髪のはしを切りそろえること。ここは欽宮の5歳10月の時の深
 曾木の祝。欽宮の御深曾木は文政13年3月26日に行なわれた。

307 一条しゆう³⁰⁸夜…准三宮忠良公。

308 こはんやかいて…碁盤を持って。

309 でやる…出ヤル。ヤルは目下に使う、京都方言の助動詞。



⑳ 倫宮のお文

310 倫^{つねの}…倫宮の自称，大聖寺24世普明浄院玉鑑永潤宮。光格天皇の皇女。生母は藤聡子^{とし}で，文政3年5月1日誕生，文政13年5月28日薨ずる（10歳）。大聖寺門跡最後の宮様。

(24) 倫宮の口上書 (§ 141)

このお文は仙洞御所にいらっしゃる倫宮様が，大聖寺の豊首座^{しゆそ}にあてて出されたもの(絵奉書・たてぶみ)で，沙弥が鳶鳥の巣をとったことに対する忠告や絵奉書の代わりをももらったことなどを認められたものである。特に幼少の宮(満9歳ごろ)の口語資料(文政12・3年ごろ)として貴重である。

口 上

311

いよ〜」御機嫌よくめて度候」

扱ハせんとハ沙弥³¹²か」とひからすのすをとつた」けな それハわるい事しや もをどもして」

しもた事ハしやうか」ないわいな あやめも」そいふていやつた」何そために成事をしてや

315 かよい してやらんとむく井か」くるわいな 何も〜へたの長文ゆへわかり」かね候や

ふてとめまいらせ候 かしく」

なを〜起用心」しや〜なを〜」朔日二日」ころにをかいかいる」やらしれんさか

い」てにそをもて」いや」あほう」しよ代」をくしや」つた 317 318 めて度」かしく

319

320

豊首³²¹そうとのへ

6

倫

[注44]

311 口上…使者に述べさせる代わりとして，倫宮様が出された簡単な手紙のこと。

- 312 沙弥…七衆の一。出家してまだ修業の熟さない人。最下位の僧。
- 313 しゃ…「じや」は指定の助動詞「だ」に当る京都方言。
- 314 ども…「どうも」の短音化。
- 315 しもた…しもうたの短音化。
- 316 あやめ…倫宮の生母，生母「菖蒲小路」を略して「あやめ」と宮様が呼ばれた。姉小路家の出，藤聡子。
- 317 かいる…「帰る」のなまり。
- 318 さかいてに…「から」に当る京都方言。
- 319 ゑほうしよ代…絵奉書代は絵奉書の代わり。絵奉書は季節の草花などの絵模様のある奉書（§ 140 倫宮の「心おぼえ」の用紙はその例）。
- 320 くしやる…くす（おくす意）の連用形「くし」に「ヤル」（§ 25-2の321参照）のついたもの。（「をくす」は遣すの音通であるとも）。
- 321 豊首そう…大聖寺に，文政年間にいた「慈豊」という首座，公家の葉室家の出。首座は禅宗六頭中の第一位の僧役，第一座とも。

〔付4〕 靈鑑寺宗恭宮のお文（§ 142）

次のお文は靈鑑寺四世宗恭宮から，御所の長橋局あての上臈召使い方許可願ならびに長橋局から靈鑑寺宮への同許可書である。

㊦ 上臈使用許可願（§ 143）

当室開山宮より上らふ名まへ斗にて人躰ご座無その後とも林丘寺、室と当室とハ同様の室から
322 = その後は表向上らふご座候様 = 致度存候 = 付御願申入候まゝ御差支もあらせられず候ハ、何
324 卒願のとをり御聞濟御座候後は仰〜忝さ何卒〜宜敷〜御取成御沙汰御事頼入候

十二月 日

宗 恭
325

長 橋 殿

㊦ 同返事（§ 144）

其御寺上らふめしつかはれ候御事また御参内のせつめしつれまいらせ候御事も何の御さしつかへもあらせられず候御ことよろしく申せとの御さたの御事あらせられ候 此よしよろしく御申入まいらせ候

〔注45〕

- 322 当室開山宮…靈鑑寺第一世浄法身院宮。後水尾天皇の第12皇女，宗澄女王。生母は京極局（壬生院）園光子。寛永16年2月3日ご誕生，谷宮たりのみやと称す。延宝6年2月2日薨去，御年40。京都廬山寺に葬る。（§ 97-1，注128参照）。
- 323 上らふ…上臈。公家の娘で，尼門跡に仕える高級尼僧。
- 324 林丘寺室…林丘寺のご住持の宮。（林丘寺は音羽御所と称し，後水尾天皇の皇女元瑤内親王が天和2年2月に創建。京都市左京区修学院にある臨濟宗）。（注141参照）。
- 325 宗恭…靈鑑寺四世，御桃園天皇のご養女（実は閑院宮典仁親王第2王女）成等覚院宮。明和6年12月17日ご誕生，孝宮と稱す。寛政元年4月1日靈鑑寺相続。文政4年11月19日薨去，御年53。京都鹿ヶ谷桜谷靈鑑寺宮墓所に葬る。

〔参考〕 明治以降の尼門跡などのお文 (§ 145)

(27) 御機嫌伺申入度 (§ 146)

この文は大正天皇崩御後、大宮様(貞明皇后)が昭和3年に仮御所へお移りになったときのご機嫌伺いのお文(折り紙、用紙は二枚重ね奉書)で、大聖寺はじめ五ヶ寺から典侍へあてたものである。(§ 111, 写真④—2参照。二つ折りの折り方などについては§ 111—2参照)。なおこのお文の筆者は筆頭門跡である大聖寺の石野慈栄さんで、手本として残されたものがある。



②① 御機嫌伺申入度

御機嫌伺申入度文= 而」申入まいらせ候 時分柄追々」寒さにおはしまし候へ共」愈」 御揃被遊」 御機嫌よく成らせられ候御沙汰共忝りまいらせ候」 いよ〜」 大宮様= も」 御機嫌よく成らせられ候 何の〜御申分³²⁶もあらせられず候御事と」忝りまいらせ候 左様に候へは去ル十四日= ハ御予定の御通り」 大宮様御事」其御所へ」移らせられ候御事誠= 恐入まいらせ候」折から御格別³²⁷の」御とうし³²⁸も」有らせられず万事御する〜の」御事と忝りまいらせ候 其後」何の〜御申分³²⁶も」あらせられずや」 御機嫌伺申入度何も御序の」御時分よろしく御さたの御事」御頼申入まいらせ候 あら〜」右のみ」 かしく

いよ〜両典侍³²⁸も」折から」御障り³²⁸もおはしまさてお勤遊ハし候」御事御喜申入まいらせ候 何かと日々御用多く」御勤の御事と御察し申入まいらせ候」折から時かふ御用心〜」遊ハし候様=と」存まいらせ候 かしく

(手本)

典侍 鍾子³²⁹

同 津根子³²⁹へ

人々³³⁰申給へ候

大聖寺 慈栄
宝鏡寺 周禅
曇華院 慈孝
光照院 聖瑞
林丘寺 兼務
靈鑑寺 徳全
331

[注46]

326 御とうし³²⁹も有らせられず…御動揺も遊ばされないで。

327 御するする…§ 25-2参照。

328 おはしまさて…「おはします」は同輩に用いる。陛下には「あらせられず」という。(目下には「お障りものう」という。)

329 鍾子、津根子…鍾子は大正天皇に任えた正親町典侍。津根子は同じく竹屋典侍。

330 人々申給へ候…脇付けの字形を大聖寺ゴゼンは「人々申給へ候」と読まれる。これは明暦のお文 (§ 116, 写真⑩参照)の「まいる 申給へ」に当る。(§ 100字形表⑩⑪参照)。

331 大聖寺慈栄 宝鏡寺周禅 曇華院慈孝 光照院聖瑞 林丘寺兼務 靈鑑寺徳全…差出人は京都の尼門跡である (§ 4 参照)。大聖寺慈栄は大聖寺門跡石野慈栄 (§ 5-1, 34参照), 宝鏡寺周禅は宝鏡寺門跡平松周禅 (平松時厚子爵女, § 5-2参照), 曇華院慈孝は曇華院門跡飛鳥井慈孝, 光照院聖瑞は光照院門跡広橋聖瑞(広橋伯爵女), 林丘寺は曇華院の兼務, 靈鑑寺は六条徳全(六条子爵女, 注128, § 142参照)の各氏。「大聖寺はじめ五ヶ寺」というときは, 上記の五ヶ寺をいう。(§ 4参照)。

(28) 天機御機嫌伺申入度 (§ 147)

このお文は(折り紙二枚重ね奉書)昭和12年8月, 日華事変の時, 大聖寺はじめ五ヶ寺から, 当時の女官長, 竹屋計子さんにあてた天機御機嫌伺である。

天機御機嫌伺申入度ふみにて申入まいらせ候 残暑なから敵しき暑さ= おはしまし候へ共愈
 御揃被遊^[改行] 御機嫌よく成らせられ候 御汰た共めて度忝りまいらせ候弥^[改行] 計子³²⁹も御障り^[改行]
 もおはしまし候へ御勤遊し候御事とめて度御悦申入まいらせ候 さ様= 候へハ此度ハ存よら
 ぬ日支事変にて恐入まいらせ候 日々戦地の奏上聞し召れ日夜御苦勞^[改行]の御沙た共同ま事ニ恐
 入りまいらせ候 折から御格別^[改行]の御申分^[改行]もあらせられず候や 天機伺申入度猶また同し御
 事= 后宮様へも^[改行] 御機嫌伺申入度^[改行]も御序の御時分よろしく御沙たの御事御頼申入まいらせ
 候 右のミ かしく

とふそ〜一日も御早く平和= 成まいらせ候様のみ祈入まいらせ候 猶々折から時かふ御用心遊ハし候
 様にと存まいらせ候 めて度かしく

(昭和十二年八月日支事変の節伺候処なり)

³³⁰
竹屋計子³³³へ

人々申給へ候

大聖寺はしめ
³³¹
五ヶ寺

[注47]

332 昭和十二年…この文は, 手控であり, 日付の覚えとしてかきそえたものである。

333 竹屋計子³³³…日華事変当時の女官長。

(29) 御ふみのやう承り時分柄 (§ 148)

このお文(折り紙)は、関東大震災の節、大聖寺はじめ尼門跡寺から天機御機嫌伺いを差しあげたことに対する千種任子典侍(呉波代筆)名の御返事である。

御ふみのやう承り時分柄寒さ強くおはしまし候へとも愈^{〔改行〕}御揃被遊^{〔改行〕}御機嫌よく成らせられ候
 めて度忝りまいらせ候 いよ〜御まへ^{〔改行〕}御ハしめ^{〔改行〕}も御障りもおはしまし候はてめてたさ左
 様^{〔改行〕}候へは号外にて御聞及ひの通り関東地方にて強震恐ろしき事^{〔改行〕}御座候 震動は随分につよ
 く御座候へとも何の〜御動し^{〔改行〕}もあらせられず御安心のやう^{〔改行〕}と存しまいらせ候 右^{〔改行〕}付早
 速に御機嫌御伺被成よろしく御沙た申入まいらせ候 当地ハ何方にも何のさわりもなく^{〔改行〕}宮城
^{〔改行〕}も御格別の事なく先々幸ひ^{〔改行〕}存しまいらせ候 和田倉門の倒潰^{〔改行〕}ハ残念^{〔改行〕}存し候 何も〜
 御沙た申入まいらせ候 かしく

なを〜この景気となた〜にも御用心〜のやう^{〔改行〕}と存しまいらせ候 正親町³⁹²もいよいよ御入院^{〔改行〕}
 相成御たつ^{〔改行〕}も御気の毒^{〔改行〕}仲間も無人^{〔改行〕}てこまり〜候 しかし御入院後の結果御よろしく安心致し候
 御めてたき御事も間遠^{〔改行〕}候へハとふそ御はやく御快復いのりまいらせ候 大々もや〜乱筆御ゆるし遊
 はし候 めてたくかしく

ぶ

大聖寺慈栄^{〔改行〕}

典侍 任子³³⁴

御はしめ^{〔改行〕}

御返事人々申給へ候²²¹

[注48]

334 任子…千種任子。大正天皇の筆頭の典侍。

(30) 御ふみのやう承りまいらせ候誠に (§ 149)

このお文(折り紙)は東宮(今上陛下)御外遊御帰朝の御機嫌伺いに対し、典侍から大聖寺はじめ五ヶ寺へあてたご返事である。

御ふみのやう承りまいらせ候 誠に朝夕はしのきよく成りまいらせ候 愈^{〔改行〕}御揃被遊^{〔改行〕}御機嫌
 よく成らせられ候 御駐輦中何の〜御申分^{〔改行〕}もあらせられず御沙た共めて度忝りまいられ候
 弥^{〔改行〕}東宮様^{〔改行〕}も御機嫌よくならせられ候 なか〜の御外遊の御疲れ^{〔改行〕}もあらせられず万事御
 滞りなく済まいらせられ候 御予定の御通り^{〔改行〕}て 御機嫌よく御する〜と御帰朝成りまいら
 せられめて度^{〔改行〕}両陛下^{〔改行〕}も誠^{〔改行〕}御満足^{〔改行〕}御安心^{〔改行〕}思し召し候 右^{〔改行〕}付恐悦御申入何もよろし
 く御沙た申入まいらせ候 右御請のみ³³⁵ めてたくかしく

いよ〜御まへ^{〔改行〕}も御さわりもおはしまし候はてめて度おりから時氣御用心〜のやう^{〔改行〕}と存しま
 いらせ候 めてたくかしく³³⁶

大聖寺慈栄^{〔改行〕}

典侍 任子

御はしめへ

[注49]

335 御請…大聖寺からのお文の内容を確かに両陛下に申しあげたことをいうことば。

336 時気…時候の意。

(31) 御ふみのやう承りまいらせ候愈御揃被遊 (§ 151)

このお文(二つ折り)は大聖寺はじめ四ヶ寺へ御下賜金増額の御さたがあったことを知らせる典侍任子・同鍾子さんからのものである。

御ふみのやう承りまいらせ候 愈 ^{〔改行〕}御揃被遊 ^{〔改行〕}御機嫌よく成らせられ候 めて度忝りまいらせ候 御まえ²方=もいよ〜御障りもおはしまし候はてめてたさ左やうに候へは此のたひ従来御下賜の賜金思召²=て御一同御増額の御さた御蒙りのよし忝りの御事猶四ヶ寺へは古来より格別の御由緒=て特別の御増額のよしふかく御畏り入=て御光栄と御こま³³⁷〜御礼御申入れなされ候 何も〜よろしく御汰た申入まいらせ候まゝ四ヶ寺猶また御一同かたへ此のよし宜しく御申伝への様にと存しまいらせ候 かしく

猶この内乍私共へも御ていねい²=御挨拶共忝さ結構=御沙た御戴にて御よろこひ申まいらせ候 何にも一つに認めよろしく承り申まいらせ候 猶この寒さ御用心のやうにと存しまいら候 めてたくかしく

ゞ

大聖寺慈栄²へ
御返事

典侍 任子
同 鍾子

[注50]

337 四ヶ寺…大聖寺・宝鏡寺・曇華院・光照院(いわゆる旧直宮寺の四ヶ寺, § 4参照)。

(32) 兎角不時かふにおはしまし候 (§ 151)

このお文は大正5・6年ごろ, 宮中の呉服係の呉波さん(関根照子さん)から, 里下り中の女官の穂稜英子さんにあてた病気見舞の私信であり, 穂稜さんから呉波さんに直接あてたお文に対しての返信である。宮中公式のお文の場合は呉服係が書いても典侍名になる。が, このお文は下級女官から上級女官への私信の一例である。

口 代
338

兎角不時かふにおはしまし候 ぶりつゝき其後如何にあらせられ候御事かと御尊³⁴⁰サ申入居候 此ほとは御すくれ兼の処御筆たまはり有難く拝見申入御挨拶御念入の御事恐入候 昨日は藤間³⁴¹殿伺ひ申され候よしとなた²へも伝言申入候 御案し申入候御容体もまつ〜御少し御宜しく御食気も幾分御進み相成候よし任子²へも御悦被遊候 しかし御体温はいまた御平温=成り不申よし御こまり被遊候御事と御さつし申入候 何分御日数もたち不申御気長に御静養被遊度存しあげ候 外に序も御座候て御祈念願候まゝとかく御すき³⁴²〜被遊す御こまりの御事申入願上候処御供奉中に御こまりの御事御同情=而早速御祈念遊ハし御符御送りの事申参り先程着いたし候まゝ御手元へ御廻し申入候まゝ御戴き被遊度候 当年は実にいかなる事にや御膳かゝりさ

た御道具かゝり孝病氣のよし下り養生願候よし気の毒の事ニ御座候 吳竹内侍³⁴⁵には御軽くあ
らせられ御仕合³⁴⁶と存し候まゝ御氣強く御ほしめし御静養被遊度存し上候 拙筆に而失礼の御
事申入御ゆるし被遊度候 乍恐お蝶³⁴³へも宜しく仰流し願上候 めてたく かしく³⁴⁴

吳竹内侍³⁴⁵

人々御申入³⁴⁷

吳波³⁴⁶

〔注51〕

- 338 口代…クチガワリ。簡単な略式の手紙の意。口上。
339 不時かふ…不時候。
340 申入居候…この句は上向きの時に用いる。
341 藤間殿…藤間卯吉氏か。
342 御すき御すき…御すっきりとの意。
343 お蝶³⁴³…宛名の女官吳竹内侍の家来の老女。
344 仰流し願上候…「お伝え下さい」の意。判任官の吳波から高等官の内侍にいうので、「仰」を使った。
同じ階級又はそれ以上には「申入れ」といい、目下には「御申流し」という。「流し」はこの場合、あ
て名の使用人であるお蝶さんに対していったもの。「申入れ」の「入れ」に対応する。
345 吳竹内侍³⁴⁵…旧女官・内侍の穂稜英子さんのこと。吳竹はその源氏名。(§ 65参照)。
346 吳波…吳服係の関根照子さん。大正天皇に奉仕し、当時50歳ぐらい。穂稜さんは20歳ぐらいであった。
347 人々御申入…目上の人に書くときの脇付け。(注221参照)。

む す び (§ 152)

以上の文献資料は主として徳川初期における女筆になる御所風の表現を明らかにするために、
尼門跡に保存されている御日記やお文の一部を原文によって紹介したものである。

筆者は尼門跡の言語生活を明らかにするために、すでに尼門跡の言語環境(第Ⅱ部)・音声言
語生活資料(第Ⅲ部)・文字言語生活資料(第Ⅳ部)および文献解説(第Ⅰ部)について述べ、ま
た「尼門跡使用のシャル・マシャル・であらシャル敬語法」(「国語学」33号所掲)の考察をも行
った。

しかし尼門跡には、さらに極めて多くの資料が保存されているので、これらの整理も必要で
あり、御所風の言語生活の全体を明らかにするためには、「お湯殿の上の日記」にみられる宮
廷の言語生活との比較研究も残されている。さらに御所ことばの生活を中心にした語彙集も本
稿に記載した諸文献などを利用して作成する必要がある、以上の総合的考察についても研究を
進めたいと思う。

なお原文の解説に当っては、できる限り正確を期したが、資料の性質上、多少の誤読がある
かもしれない。この点については、後日さらに正確を期したい。

この研究に当って、諸資料の集収ならびに調査にご協力とご援助をいただいた大聖寺門跡・
宝鏡寺門跡その他の諸門跡、元女官の穂稜英子さん・山口正子さん、種々有益な指導をいた
だいた是沢恭三博士・三品彰英博士・江馬務教授・池上禎造教授・阪倉篤義助教授・梅田俊一助

教授・大塚実忠氏，ご援助をいただいた旧京都堂上会の方々，その他の関係各位に，心から感謝するものである。

〔補記〕「貞丈雑記」 (§ 153-1) ・「女官」 (§ 153-2)

第 I 部の「女房詞の文献とその解説」 (§ 13) で言及しえなかったもののうち，特に伊勢貞丈の「貞丈雑記」 (宝暦13年起稿, § 153-1) および河^{かわ}鱒^{ぼた}実英氏著「女官」 (昭和24年, § 153-2) を付加える。

貞丈雑記の「飲食物之部」に，「禁中女房の詞食物異名品々禁裏女房内々記に云 ○くだむの御膳とは常の御膳部也……」として，約92語を掲げ，さらに「言語之部」にも解説が加えてある。

また，「女官」には「秘められたる宮廷の言語」の一章があって，「オモウサン」，「オタアサン」のような女房詞が多数記載されている。

(本研究は昭和33年度文部省科学研究費交付金「各個研究」によるものの一部である。)

Linguistic research data of the journals and the letters in *Amamonzeki* nunnery (IV)

Y. Inokuti, R. Horii, K. Nakai

This paper deals with the ancient journals and letters retained in *Amamonzeki* nunnery. These journals are important to study the court lady speeches. The diary of *Daisyôzi* and *Hôkyôzi* has been successively recorded by the nuns since 1660 after the fashion of *Oyudono* diary in the court. The letters of *Amamonzeki* are the records by many court ladies who corresponded with the princess nuns. These journals and letters contain many description of the ancient practices and the year's regular functions in the court or in the nunnery of the early period of Edo. From linguistic point of view, these materials give some good examples to research the graphemic features and the honorific expression. The authors added here the interpretation of written records and the forms of graphs in the table § 100.